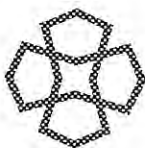


歌集
地球にて
高山由利



石川書房

地球にて 目次

昭和五十二年

三

昭和五十三年

二

昭和五十四年

元

昭和五十五年

癸

昭和五十六年

己

昭和五十七年

庚

昭和五十八年

辛

昭和五十九年

壬

昭和六十年

癸

昭和六十一年

甲

昭和六十二年

乙

昭和六十三年

丙

平成一年

平成二年

あとがき

一七

一七

三〇

地球にて

昭和五十二年（一九七七年）

ユーカーリの花粉散りくる光の中昨日のつづきのことを想える

ポプラの葉の落ち重なりてうらおもてわが手に打ちし白球はどこ

白球は方あやまちて花すぎしハカランダの枝うちおとす

草の香を吹く夕風の冷えきたり樹肌に凭りてほのほのといる

全身に馬の体温を感じつつ散りたるポラーチヨの花踏みにじりゆく

風のなき日にもポプラの葉は落ちて細き枝々の向うは夕焼け

ポラーチヨの花咲く枝に髪ふれてわが乗る白き馬は全速

泳ぎいしはいつの日ならむ石の中に石と化したる魚は重し

幾万年同じ姿に固くなりて今日よりわがもの石となりし魚

高き高き空ゆく飛行機の中に居て化石の重量がわが膝にある

プラタナスに数うるばかりの葉の残り球打つ人を遠くに認む

海を来たりし自動機の始動する花ある枝のユーカリ揺れて

今は暑き祖父母の国へ由野はゆく仔牛の息の白きをいいて

わが家のあるじの江戸っ子居らぬ日は三河の味噌のおじやを食べる

髪の色金茶白赤混る中黒き光りて吾が子は跳ねる

天の川の見えざる国に住みおれば星の話は南十字星の下

竹を見ること少なき国の暮しにてクリスマスツリーに短冊吊す

七夕を六日も過ぎて見つけたり痩せて小さき竹科らしき草

型紙を彫りし名もなき刀技追いつきがたしと思ひ見えており

合歓木の上より射し来る朝の日は馬上の私の濃き影つくる

冬枯れの枝を透してさし来たる朝日に私と馬の息白し

ユーカリの落葉焚きいる煙の中資材不足のこと思いつつ歩む

飛行機の座席の下に毛布敷きて眠りいる頃か明日帰る由野

思うこと一編あみごとに重ねつつ赤きスエーター出来上りたり

梅干しの日本が好きだとわが玉由友等と共にスペイン語やかまし

背のびして折りてくれたるアロモの花今日は一日素直に居らむ

始めて出逢いに心に泌み込みしアロモの花を想いう幾日にち

樹々はみな花咲くものということのアロモの木よりつくづく知る

枯れし葉が二つ三つ四つつきしま芽ぶき始める木の下にいる

日本より移し植えたる紅梅の花の散りくるところに坐る

ま白くてほのかに甘き味のするお粥は母の小梅にて啜る

私に吹きくる風の冷たくてプラタナスの木はまだ芽ぶかない

ボラーチョの木をくりぬきて面を作るインディオの主食は玉蜀黍

収穫踊りのインディオは軽きボラーチョの狐の面をつけて踊る

酒のあり肉の煙の中のパーティーにケシの花びらの落つる音あり

ケシの花は志野の花瓶に定まりぬ心はずみて來客を待つ

宴終えし昨夜ゆうべのままのテーブルにケシの花粉の散りたまりおり

曇りくるフロントガラスを拭う時別れということ消したく思う

始めより離れゆく人と知っていてツツジの咲きてその日來りぬ

思わずも眼にあふれくるものあり私の心は生きているらしい

友のゆくニカラグワという国知りたくて地理の本地球儀の埃を払う

友ありて飲みし酒などうまかりき離れゆかざる寂しさ残る

パナマにて私の前を通りし大トカゲ十年たちてその顔忘れず

走りゆく車の窓より見ゆる木々みにくき形は一つさえ無し

世界一の大公園に私ひとり雨に濡れいる木を見たく来て

日の丸と生れしアルゼンチンの旗振りて二つの国に育ちゆく吾が子

十分間の一人の時刻ときのうれしくて梅花の雄蕊きを数えておりぬ

学校へゆくのと同じ顔をして今朝ブラジルへ発ちゆく吾が子

三日ばかりサンパウロに遊び来てポルトガル語の歌を歌う子

ブラジルに日本がいっぱいあつたわと餅や沢庵を抱え来る子よ
待ちかねて毎日仰ぐオンブーに今日は萌黄の色の見えそむ

年輪無き大樹オンブーの並木あり毎朝通いて今日春となる

春の日をまともに浴びて船を描く私に金髪の人が声かけてゆく

明朝はリオへ出港の貨物船甲板よりボカの町を描きおり

ポプラの葉五日見ぬまに出揃いて曇り空透くまだ稚くして

日本の食物の無きニカラグワへ行く友に差し出す母の梅干

船便にてアルゼンチンに来たる海苔少しばかりも友に手渡す

オレンジを満載したる船が着き二百個買うのを慣わしとする

同じ想いを十度重ねて白々とカラーの花は今年も咲きぬ

こともなく十年住み来し国にして恐るる日あり日本は遠く

ハカランダが咲けば日本へ帰る頃吾が子は仰ぐ冬枯れの木を

一本の木ですら月日の楽しき埋もれるほどの木の中に住む

きな粉とは大豆の粉と気づきたりブラジルの餅の安倍川を作る

アルゼンチンに來たりて始めて名を知りし黄の花揺るるを落着きて見る

春の花を手あたり次第に飾りたて色褪せかかる心まぎらす

日本より一番遠い国に住みてもつとも贅沢は日本の真似

我儘なる性を私に遺伝せし祖母をおもう石竹の季こころ

祖母に似て流れゆく雲咲き始むる花ただただ眺めているが好きなり

9
私の上ぐる高さに桃咲きてまた思い出の重なりてゆく

二見ありて父兄会にもゆくわれは母を呼びたり昨夜の夢に

風強き昨夜をいかに過ししか今朝一番に桜に逢わむ

じつくりと肌をみつめる癖つきて空色の瞳の裸婦を描き終う

昭和五十三年（一九七八年）

植木鉢の苺一つに二人の子は半分ずつという語を覚えぬ

枇杷の木は小さき鉢に日々育つ移して植える土は無くして

日本の歴史が私に教えしと染色のインタビュアーに答えつ

洪紙の洪の説明むずかしくついには柿のジュースとなりぬ

空の色と見まがうばかりの色をしてハカランダの花の咲く日近付く

オンブーの芽ぶきを待ちて花の咲き螺旋の実の成る秋とたちまち

国の花セイボと名づく馬に乗る常なる景色が美しく見ゆ

抵抗して落馬させむとこころみし栗毛が今日は私の意のまま

11 ジーンズの上より羽織りてしばしおり父の選びし扇面文様

わが母の角隠しせし日の帯もしつけのままの着物も持てり

型染め友禪染めの区別のなき人々に話す言葉も疎かにせず

鉢植の青紫蘇育つを待ちかねて双葉を摘みて天扶羅にする

風になびく葎は地上八階のベランダにして南十字星見ゆ

停まりいる車の上に紫あり咲きて散りゆくハカランダの花

何故に瑞々しきまま散り急ぐ両手にあまるハカランダの花

あと十日安らかな夜を重ねれば未知なりしことの一つは消えむ

しみじみと思うまでもあらずして紫の花散る道をひとり行く

曲りつつティパの並木まだつづき乗馬靴にて落花ふみゆく

優越感のある席にいる三時間何国語かも解らずに過ぐ

平穩に常の生活続けいるわが横顔を載せし新聞が来る

まちがえてスペイン語など話している私の声がラジオより聞こゆ

ニカラグワの熱き芝生にいたる時鳴かず飛びゆく尾の長き鳥

椰子の実がたわわに実る庭の芝ニカラグワの子が走る我が子が走る

採りたての椰子の果汁のなみなみをひと息に呑む生暖かし

パイヤの青き実のなる木があり嬉しくなりてニカラグワにいる

オレンジの豊かに実るフロリダにコンデンサ捲きし頻りに思しきう

あこがれの綿畑ある国にきて綿花白きを見ず通り過ぐ

初めてのニューヨークに雪の散りトップモード探す私に二児の従う

13 旅の仕度まだはかどらず散ってくるハカランダの花を手を受けている

日本への旅の途中のニューヨーク握飯を作らすレストランにて

幾度か飛行機乗り継ぎて辿り着きまず見るは東京の白き大根

久し振りの人を待つ間の短かかりひと花残る山茶花の下に

あこがれつつ暮しておりぬ大根が店先にあふるるこの東京を

強烈に肌を刺し来る光に慣れて今日は東京の冬の淡き日

年末の折込広告の裏白に図案描けと吾が子持ち来る

沈丁花の蕾ふくらむ東京に死ぬほどうれしと吾が子らの言う

子供等のはしゃげる声を聞きながら富士ある景色にうろろうろとい

大根が土よりのり出す畑続き日本にいろとつくづく思う

富士山の遍あまなく見ゆる景色の中を二百キロにて走り過ぎゆく

日本の国籍を持つ吾が子にて山盛りにして食う金山寺味噌

朝毎に高山神社に詣でつつ吾が子の日本の二十日間過ぐ

鯛焼の焼ける順序を幼子と立ちて見ており雪ヶ谷の北風の中

寝起きする国に言葉も習慣ならわしも合わせて生きる幼子ふたり

アルゼンチンより早く帰れと呼ぶ電話耳になじまぬごとくに聞きぬ

餌代をおきてあずけ来し二匹の亀朝に夕べに子は思い言う

刈り株の乾きて連なる道をゆきわが飯を盛る陶を作らん

窯脇に立つ足土間より冷え来つつ粒ある粘土の菊練りをする

硝子戸の鳴りつつ轆轤まわしおりざらつく土より皿の出来る

暗きまで雪雲厚き日の午後を伊吹の麓の友に逢ひにゆく

雪雲の垂れたる伊吹に近づけり日本の旗のちぎれはためく

踏まえたる史実隴の琵琶湖にむき波だつ沖を見ているばかり

石焼芋を包み来たりて暖かき日本の新聞をしばらく読みぬ

琵琶湖なる鮎の洗いを噛みしめてウスバジャタのことを思いいだしぬ

三枚の奴胤を居間の壁にかけて田園調布の今年の冬を

東京の真冬のいく日鰻食いて吾が子の暑中休暇終り近づく

高山神社の福豆を子等は撒かずして日本の鬼に逢いたしという

咲き続く藪椿一枝部屋に挿し垂れくる蜜の甘きも知りぬ

頼陽という造り酒まろまろし私の育ちし国にうまきものあり

作業衣のポケットの中に隠し来しロッカーの鍵を思うこのごろ

雪柳の真白き満開を待たずして今は真夏の国へ帰らむ

凍る日と凍らざる日を確かめつつ洗足池の柳道毎日通る

黝き関東ローム層を馳けめぐり赤土の国へ帰るかゆかむ

芽ぶきいまだ柳の枝のゆれゆれて帰る日来たり帰りてゆかむ

御津より来て今グワテマラの夕焼の下同じ時刻のめぐりめぐれる

グワテマラの伝説読みつつ立ち寄れる休火山つづく山脈やまなみなつかし

夕焼のグワテマラ空港の束の間を火山の噴煙の動き見ている

天と地と境界線の見えぬままコーヒー飲みおり一万メートルの空に

椰子の木をシルエットに見る道をゆきてパナマの国に一夜眠らむ

芒の穂ほほけてなびくカンポ見え我が住むアルゼンチンの上空にいる

乗り継ぎて飛行機の旅今終えて自らの場所に雨畑の硯あり

長々とわが肢長き心地して異国に慣れしを寂しく思う

三ヶ月の留守に伸びたる伸びぬ木をこの新秋より見つめてゆかむ

黄金わうごんの實の木に棘を確かめて枳殻の匂い思いきり吸いぬ

体温の伝わりて出来るうどんありと長き年月思っていたり

鈴なりの松ぼっくりを仰ぎ見る私に吹きくるアサードの煙

スペイン語の教科書を読む声聞えきて吾が子の夏の休暇終りぬ

ひと夏を冬の日本に過し来て私にはほけたる芒吹く風

綿の産地グワテマラ国を通り来て腰にまとうは人型絵紺

流れゆく水に沿いつつ歩みきて野菊があればひと休みする

握り飯を頬張る我らの近くに來て水飲む馬あり川は流るる

穏やかなるコルドバの山を見ておりぬ去年とは違う思いを持ちて

地球儀に線を描きて確かむる幼児携えて七十二時間の旅

淡々と湯気のやさしき酒饅頭食みていで來ぬ父母のもとを

父母の生れし季節を思うまで私にゆとりのある日々となる

秋になる雨長々と降りそそぎベニハベゴニアは根腐れとなる

南十字星の高くに見ゆる季ころとなりて日本より帰り常の日にいる

日本に一年の¼を過ごし來てコバルトブルーの蓋があかない

ジンジャーの花はまさしく香りおりサントスへゆく煙害の道

19 タラップを降りつつしたる深呼吸ブラジルの国にはブラジルの味

新しさを求めてやまぬ夫あればジンジャーひと花わが物とする

スペイン語ポルトガル語英語の機内にて私は読み続く万葉秀歌

日本人が二万人住むアルゼンチンなれば黴浮く醬油を食卓に置く

白飯に白菜漬けの朝食の吾が子はアルヘンティナモデロの二年生なり

地平線まで続く平らなカンボに慣れて易易暮す^{やすやす}日本人私

朝市にマモンデアマソナを五個買うにポルトガル語を使いてみたり

ブラジルの我家ははまだ家具なくて久し振りなる我声響く

二三日をポルトガル語にて過さむと坂道多き国の地図を買いたり

トロピカルの名知らぬ果実の並ぶ中に大根もあるブラジルの市場

ブラジルの朝市の人らに交りつつ留守居する吾が子をしばし忘るる

西に

サンパウロの町を東に三日間子無きがごとくひとり歩きぬ

抱え来しパイヤにはレモンをかけてまだ明けきらぬ朝の食事す

六十日たてば芽を吹くと水を注ぐアマゾンシダの毛深き根っこ

アマゾンの樹々の動きの見えぬまま樹海の上を夕焼に翔ぶ

アマゾンの樹海は続き緑濃し巨き太陽の没ちゆく所まで

十幾年思い続けて今私の物カリブの島のモラという布

緑少し残り散りくるポプラの葉馬上の私の肩をかすめて

露光る合歓の木下を好みつつ走らす白馬に慣れ慣れている

音たててポプラの落葉踏んでゆくわが乗る白馬は汗にぬれつつ

21 鉢植のか細き葱をきざみおりブラジルより夫の帰り来む刻

牛の仔の生まるる季節を野にいでて雨雲厚きを氣にしておりぬ

陶土を棒もて叩き気泡を抜くこの方法もわがものとす

南米の赤土の色に流れゆくラプラタ河にしばし浮びぬ

蓄持つ八重の椿を船首に挿し赤土の水に波を作りゆく

アルゼンチンに育ちゆく吾子に笹舟を作りて土曜の午後の過ぎゆく

丸々の2Bの鉛筆手に慣れて十分毎のポーズを追いぬ

南米を見よと旅人をみちびきてラプラタ河の葦ゆるる岸

思っている裸婦の線一つ描けずしてタンゴ聞こゆる今日の二時間

たし算にも掛け算にもスペイン語のある故に新しき言葉この頃覚えつ

鞭を持ちて教えしままに走る馬ギャロップとなるわが振る鞭に

プラタナスと並べる長き朝の影馬上の私の背筋を正す

はやばやとたそがれてゆく冬の日に父母を思う時間が多い

松の木の下に私の香ただようを一人の夜に思っておりぬ

切々と心に重きこともなく早朝の靄に歩いていたり

咲きつづく芙蓉の花を手に取りて嫁ぐ日の色と決めし日のあり

今朝の霧ポプラの落葉に凍りつき見せたき人のふたりさんにな

鉛筆にて描きし私の足の形してチョコレート色の靴出来てくる

黒人の衰しさひびく劇場のたったひとりの客は私

能の足黒人の足裸婦の足を想い込みつつ過ぎゆくうくがう六月

23 私と全く同じき人はなきものと午後の石畳の道歩みゆく

パレルモの散歩より帰る幼子はユーカリの香を運びつつ来る

くさぐさの雑用を一人持ちおりて歩み安けし落葉敷く道

一つこと思い込み来て十余年今日手にしたりインカのポロ布

犬らしき小動物の並びて並ぶインカの布の清し手仕事

山に登る男の持ち来しミイラの布に私の人生の始まりたりき

アロモ咲く去年と同じ景色なり距離あるままに立ち去りてゆく

地図ならば線もて別るる国と国と言ひ争いぬ受話器通して

何もかも消え去りてゆく如くにてひたすらに白き馬を走らす

真向いの朝の光の眩しさをかまわずにゆく白馬と私と

去年より思いいること止めどなし足跡深く新雪をゆく

新雪に兎の足跡続きおり立ち止る私にアンデスの風

今日よりも寂しさ深き日は無しと過ぎし日のこと思い出づる日

十日前異なる人種の人々と頬寄せ合いて別れきにけり

これよりもなお美しき色を知らず雲海の上に太陽はある

雲海の中にわけ入り白々と雲の粒子の可愛かりけり

アンデスの麓に来たりて足元の雪が舞うのみにみとれておりぬ

コーヒーの木を恋いおりて今持てり双葉ばかりの稚きものを

パタゴニアのインディオが狩の石鏃を七つ集めて満足しおり

その昔狩猟に使いしという石鏃並べ置くなり私の枕もと

ストックの跡の雪穴細くして透き徹る青を続けゆく遊び

あまりにも面白くなしと思いつつ休暇の吾子のブランコ揺する

少しずつ日の長くなるを言いながらアルカリシールを食べ終りたり

露しとど含める朝の芝の道乗馬靴ぬらしてアロモに近づく

汗いずるまで馬を馳らせてわが手はいまだ冷く硬し

ケブラーチョの丸太は真白き灰となり昼餉のアサード焼きあがりたり

伝いくる馬の気嫌を思いやり今朝吹く風はパンパより来る

梅檀の木に繋がれて立つ馬のたて髪乱してパンペイロ吹く

桃の花の咲き始むるかと眼を凝らすチビリッコイへ近づくと道に

馬上にて目測しおり蔓の伸びパッションナリオは他に先がけて

鼻丸きマテの仮面の並びしニカラグワの市場は戦いの中

ボラーチョの綿毛のごとき種子の飛ぶビル建つ町のまだ寒くして

日溜りを探して運ぶ一鉢のコーヒーの木の伸びはやくなる

常に描くモデルの肌の光りおり楽しき心を今日持ちおらむ

隣り合うウルグアイ国は見えぬままラプラタ河を指さし示す

六十キロ向うのウルグアイは見えずしてラプラタ河は波立ちており

祖母よりのオブラートを仕舞い置く幼子の抽出しは鍵かかりいる

肘丸くなりたる黒きスエーターを仕舞はむとする今日よりは春

目的あてもなく歩きいてヒイラギの細かき花にめぐり逢いたり

夕食をしている時に私を呼ぶ電話は落馬さまの様をこまごま

27 フレンチの街角を曲れば淡く淡く梅檀の並木咲き始めおり

裸婦を描きつつアントニオと話しおり一つの線の究まるところ

泥棒の文様だよと吾子さわぎ冬物を仕舞う唐草風呂敷

私の心に入りてより五年過ぐラパチョの花の満開のとき

年輪を持ちたるままに石化せし丸太は重くわが掌の上に

鉢のニラ皆摘みており久々の客はわが家に遠く来りぬ

ケブラーチョの丸太を部屋に立てて置き心満ちたる日々につづきぬ

私だけの勢ある線を描きたくて反古紙つくる今日も二時間

桜の花散りゆくさまをまた見むと次の風を待つしばらくの間

昭和五十四年（一九七八年）

地平線まで続くカンポの新草に一際早くアフレキージヨ咲く

近寄りて見る人もなく移りゆくカンポのアフレキージヨの今花盛り

枯れてなお花茎立ちいるアザミにも新しき葉の萌えいずる季ころ

柔らかき葉の重なりて木洩れ日なき桜の下に稚子わきどりとおり

客の来るたびに南米の黄土の水しぶきを上ぐる遊覧船に乗る

アルゼンチンを四日間にて見むと来て私のリズムを又壊してゆく

水溜りを嫌がる馬に鞭を当てて今朝の一時間早く過ぎたり

泥んこを蹴ちらしてなお走らする私の白馬の愛いとしかりけり

レタス葉の三四枚を日々に食う亀の甲羅の不思議に堅い

洋梨の色良き一キロを買う時にリカルド・ペレスが声かけてゆく

ティパの実の黒きを踏みて行き行きぬラプラタ河畔のレストランまで

ハカランダの堅き蕾を仰ぎ見る私に射しくる太陽強し

馬上にて四人五人と挨拶交す朝の光のまぶしきなかに

わが髪の靡きいることを感じつつギャロップに行く白きわが馬と

銀色に見ゆるポプラの葉の色もわが髪を乱すと同じ春風

一回り大きな鉢に植え替えて留守せし三月にオンブー絶えつ

一日の終りのときに少しずつ文明歌集を読むに慣れたり

腕を組む裸婦の指先を描く刻は吾子らひじきを食べている頃

日の高き刻より裸婦と籠りいるわが気まぐれの線を描くため

肉を食うナイフで削った木のペンにて線を描きたり裸婦が描けたり

マルボンの散りたる赤き花びらの流れ片寄り春の雨降る

停まりいる車の上に音たてて桑の実落してゆく風のあり

地の色うすしらすきを淡紫うすしらすきに変えているハカランダの並木を通りてゆきぬ

散りてくるハカランダの花瑞々し幼らは拾う手にあふれつつ

天然の暑さ寒さなき飛行機にて真冬の日本へ近づきてゆく

ロッキーの鋭き山脈をかいま見てたちまち雲の中に入りたる

アラスカの針葉樹林に沈みゆく太陽はのこす色ほのほのと

長々とアルゼンチンまで流れゆくチエテ河の岸ブラジルに居る

ラプラタの水にさらされまろまろの小石も拾い日本へ行かむ

柳の葉は朝々に減りて小波の水面広がる洗足の池

望みいし日本の空気を吸いながら何か足らない思いもありぬ

種の無い蜜柑食べつつ手慣れたるペン持たぬままに日の過ぎてゆく

ゴミを出す火木土曜日に従いて住み慣れゆくか東京の街

大根はほとばしる水気を持つものと忘れて長き日々過ぎて来し

日本の文字の看板を読みゆくアルゼンチン国籍のわが幼子と

ひび割れた黴の生える供餅の固きが好きなりわが幼らは

米の味を知りたるごとくよろこべるわが幼子にささにしき炊く

二回転ジャンプにいとむ幼子は日本のうなぎをひたすらに食う

カールせる髪の軽やかさ思はず裸婦アマリヤと遠くにおりて

口の中に苦味の残りて清々し川根のお茶の日本に居り

ポルトガル語とスペイン語交じえて話しゆく土曜の午後の新宿の町
連なれる品川ナンバーの車数えつつ子らと朝ゆき夕べに帰る

公孫樹の枝かすめてバスの走りゆく去年の冬と同じ東京

ココロヨリヘイワヲアイス片仮名はコンピューター占いの私の性格

大切な物とスーツケースに仕舞い込む乾きて軽い河豚の鰭等

袖付けに小さな解^はれの始まれるトレーナーを洗う一日の終りに

早くよりアルゼンチンから電話掛りマテ茶を飲みぬ朝の食事に

ようやくに辞書の置場の決まりしを旅の荷物を作り始めむ

アルゼンチンに織機四台持ちおりて又買ひ足しぬ卓上の機を

易々と十キロの小包の出来上る鹿尾菜ひじきも若布わかめも九ヶ月分の量

心痛むことは言はずに騒がしき時を作りて帰り来にけり

洗足の池に緑の映る日を思い描きつつ立ち帰りゆく

朝夕に眺むる池に足を洗いし日蓮上人の二十八代目のわが子

飛行機の小さき窓に頬寄せてオントリオ湖は凍りいるらし

円とドルとクルセイロに入れ換える私の墓口は江戸小紋なり

芒の穂波だつカンポの見えくれば長き私の旅の御仕舞

黒く光るパイヤの種子を取り出しいだブラジルの夜風涼しくなりぬ

割箸の副木小さく見ゆるほどに一夏過ぎし私のオンブー

幼らの残して眠るひとことを噛みしめておりおかあさんの家

日本に残し来たりし大根の半分を惜しむ今日の昼餉に

枝先の花をわずかに残しつつハカランダありわが子らの国

吹く風に夏の終りの伝いくる南十字星あり八階の窓

ボラーチヨの花満ち満ちて咲く並木今年も集めむ落ちくる花を

忽ちに子らの友達集まり来てスペイン語の国のスペイン語喧し

日本より最も遠き距離の国アルゼンチンのスペイン語親し

ひと夏に曲りて伸びしオンブーの姿直さむ鉢をまわして

古伊万里にスパゲッティを盛りて食う窓辺には私のオンブー揺れる

洗面のたびにむか対う私の顔あきらめ知りたる部分もありぬ

このわたと共に酢漬の海鼠うまし大西洋にも生息しおらむ

自動車の響消えざるビルの街虫の鳴かない風吹いている

大木になるべき素質のオンブーに加えてやりぬ新しき土を

たしかには日本の方角わからねど月の光にオンブーの影

新しく我にきたれりレクエルド背高き馬よポラーチョに届く

立ち枯れの青紫蘇の種子を集めたり三代目にて香の淡くとも

夏物の制服は無きわが子等の息白き朝授業始まる

アマリアの高き鼻筋を描きゆく日本の顔は描き慣れぬまま

黄色なるわが肌を忘るるひと時のしばしばありぬ十三年経て

枝のあるかたち整えてコーヒーは土より立てりひと鉢の土に

思いつつスケッチなどもせぬ儘にブーゲンビリアの花過ぎゆきぬ

ぬかるみは滑りやすしと幼子は知りてイースターの休日終る

わが居間に虎の面一つ増えたるを気付かぬ人もうらやむ人も

アトリエの小さき隅にうずくまり足を描きおり骨格おもいて

湿度ある地下のアトリエに通いゆくプラタナスの落葉散りしく道を

わが心に熱く燃えろと選びたるパスキスタンの布を着ての一日

コルドバの径みちの莖の根づくらしわが八階の隅の日だまり

日々使う国語辞典の最終ページわが旧姓の書かれしままに

御津の道のなかなる仏の座幼子は記憶すいつの日までも

何ひとつ逆らう色のなきままにプラタナスの秋の葉つづくなり

前をゆく馬上のリカルドに枯葉散りポプラ透かして高さ空見ゆ

コーヒー葉末の露のおつるまで佇ちて見ており寒くしなりぬ

一日に幾度も歩みとめて見るアルゼンチンの高き蒼空

八階の私のベランダに置く本草自然淘汰はわが眼にも見ゆ

常に持つバッグの中の手鏡はあかるき紅あかの京鹿の子

日本とアルゼンチンとを棲み別けて仰々しきことは嫌いになりぬ

はかなげに花を浮かべてジャスミンのお茶を飲まむとする夜の時

成長の止れる秋のオンブーをカーテン代りにベランダに置く

合わせたる葉を少しずつ上げゆく動きまだありコーヒーの木は

馬の首叩きしていたわる私日々人の噂は遠く遠くして

日当りの縁に坐りて麦稈の籠を作りてくれし祖母

アマゾンの樹海の一枝削られてわがスープ飲む匙となりたり

まだ行かぬアマゾン深きインディオの作れる匙も布も私の居間に

巨きさの理解出来ざる幼子を連れて恐龍の尻尾のあたり

わが姿化石となるはいつの日か巨き大腿骨の風化も止みて

あまりにも古き世のもの並ぶなか獣の糞ふんの化石をよろこぶ

ペソで買うオレンヂの価換算を幼子とする一個十円

石か貝かついに見分けのつかずしてアフリカ沖の海胆の巨き棘

両の手にわが子を抱き逃げるさま異国住まいの潜在にあり

鼻丸めんき面を買いたるニカラグワの飲料水なき戦の記事

吐く息の白きこの朝うれしくて私に吹きくる南極の風

腐りたる水を分けつつ小舟ゆく人の往き来に川幅広く

隅田川を渡ると同じき臭いありボカの澱よどみは人間の証あかし

大小の裸像の廊みちを通りゆくプロフェッサーマキに初めて逢はむ

無造作に置かれし裸像の大きくてパロサントの横に席をつくりぬ

間違いのあるまま線を描き来て三年目の今日マキ氏に逢いぬ

跳躍の練習なりとは言はずしてオンブーの実に幼子は跳ぶ

折り紙の切れ端も捨てざる幼らは見ぬ世の祖おやにつらなりており

スペイン語と日本語とを織りまぜてようやく割り算こたえの答こたえいでたり

何の實の種まじりいる鳥の糞ふん乗馬ズボンの我に降りくる

日本へは行くアルゼンチンへは帰るよと言いつつ寝たり私の幼子

氷山の間をぬいてはるばるとわが窓に来る南極の風

何万キロ運びきたりし八丁味噌千六本の汁はうまいよ

教えてはやれないことが日々に増す吾が子はアルゼンチンの小学二年生
手も足もわが身にありて健やかかなり正しき姿を描くは難し

ようやくにつつじの花の咲き始め素焼の花瓶にその花を描く

何事もなく過ぎてゆく一日も書き残すこと次々にあり

一年の日々を重ねて今日のためベゴニアデクレオパトラの花茎高し

私より巨き女を描きゆく金髪のアたりは背のびをしつつ

和訳をすれば“ささやき”などと名づくべき黒き馬にまぎれておりぬ

あした
明日には忘るることを悲しみて幼子は習う曜という字を

わけ知らぬ六歳の子にも聞かせむとアンドレス・セゴビアの前に坐りぬ

熟しゆく種子を梢に保ちつつ冬の日に立つハカラランダ

盛り上げし陶土をナイフにて削りゆきアマリアの姿を造りいださむ

イギリスにて炭と焼かれし小枝もて裸婦の姿を描きゆくゆく

一センチ切れば心も顔つきも異りて見ゆる私の黒き髪

炎と見ゆる大樹もわが家の鉢植もともにオンブー新芽たちくる

枝々の先まで見ゆる冬の季の色の少なきを好みつついる

何ということはなけれども柵に置きて駝鳥の卵一つうれし

ガラス戸にわが体温の移りゆく葡萄の幼芽を見ている間にも

何よりも好きな物よと名を上ぐるチリモジャ緑に逢うのは二度目

箸よりも細く小さな椿なれど従いており四季のめぐりに

向いあうビルを覆いて隠すまで育てよベランダの私のオンブー

ドイツよりビール運びてきし壺が骨董となりて敷物を敷く

木々の芽の出はじめてより風強き日の多くして心疲るる

雲を割る光の線の素早さを好みておりぬ幼き頃より

雪の如く天を覆いし蝶の群離れし一匹標本となる

鼻筋を高くとおして落付きぬ陶土につくるアマリアの顔

わが塑像なおさるること多くしてマキ先生の体温残る

見ゆるもの見ゆるそのまま描くことのこの難しさいつまで続く

日本より伝わりきたる映像に紙吹雪散り乱るアルゼンチンの街

距りているとも思えぬに太陽の側のコーヒーの木**のびのび**と立つ

紙縫作る日のまた来るは忽ちにて和紙など探すうろもまた

逆光に若葉ブドウ葉透きてくる朝の光の中のしばらく

色あせしつじの花をつまみ採るひとり落つるを待ちがたくして

青インク吸わされ伸びくる小豆の芽幼子の実験七日目となる

シャッターをおろす前にもう一度たしかめて見る南十字星

緑濃き川根のお茶を飲む時に南米に住むを思い出だせり

餡黒き酒饅頭を思うことかなわず住めば忘れゆくらし

わが話すスペイン語少きにありありと破やぶられたり外国人と

オンブーの伸びゆく物指モノサシ持ちて確かむるこの朝々を樂しと言わむ

捨て置きしコルメナの鉢に花咲けば晴ればれ私の居間にとり入る

昼前のあまり時間に作りたり粘土の裸像は腕を組ませて

近よりて見ぬまに緑のまじりくる桜の季節はうろうろとする

木と水と光を求めてパレルモに集る人らに仲間入りする

濃く淡く墨を水に遊ばせて視界に色のなきごとくいる

ひと枝の淡きむらさきを拾いあぐ梅檀の並木石畳道

根を曲げて盆栽となる筈の私のオンブーは枝たくましき

香りのみ美味しきものかわが鉢に三年目なる青紫蘇香らず

空中の水分吸いて花咲きぬ季ときをたがえぬ私のオンシジューム

亀かめと呼ぶ声聞こゆマルガリータの唯一知る日本語にて

この夏には三十センチは伸びたつと計算しており鉢のオンブー

ひと碗の汁に三つ葉の香り欲し居間の日向に水栽をする

何を食べ何を控える当もなくアンモ貝の化石を買ってしまいいぬ

自らの右の手の爪切れぬ友幾たりもありアルゼンチン住い

物が皆立体に見ゆるこの頃は新しき次元に住みいるごとし

太陽を吸いたるトマトのまる嚙り塩の砂漠の塩ふりかけて

週に四度我が為にポーズしてくる裸婦アマリアとふた年の過ぐ

買い置きしキロを単位の洋紙をも反古となしたり裸婦を描きて

一本のサッカーのテープ持ちおれば五度目のパーティを開かむとする

味噌を漉して味噌汁つくれるマルガリータ帰りゆくべしパラグワイ国へ

一年の終り近づく春の花ブエノスアイレスハカランダの花

目覚むるも眠るも境なきごとくパナマに着きぬとろとろとして

わが膝に体温伝えて眠る子よ三ヶ国を経来て時差の混乱す

蟹かとも紛^{まが}う味する蝦を食う運河ゆく船の風景の中

探すものあるというにはあらずしてコロンにまた来つ十三年経て

眼を伏せて貧しきものを阻みたきコロンの暑き町中を歩く

それぞれの国の空気の異なるも五ヶ国目なるバンクーバーは淡々^{あわあわ}

三百平方の氷の広場求め来ぬ子等とはるばる一万五千キロを

アンデスアマゾンロッキーナイヤガラ地球儀と同じき本物がある

国々を泊りゆく宿の夜の枕気に入るも入らぬもそれぞれに

なつかしむごとくに話すスペイン語ロッキーの風の冷たき所

わがためにシェリート・リンドを弾かして船に遊ぶも旅人なれば

小雨降る撰氏八度のバンクーバーわが立つ位置を地図に指さす

一年に十七センチ背丈ののびし子と連れだちてゆく本門寺辺り

緑呀え信州の葱煮えている日本の湯気やわやわやし

湯煎する蜂蜜の香よりよみがえるアルゼンチンのカンポの香り

日本の図鑑を調べ三、四冊メキシコの草は名を知らぬまま

ピラミッドの石を割りて咲きおれば雑草にしてだんご菊に似る

眼つぶりて目の見えぬことを確かむるわが幼子と椿咲く道

東京の水に馴染まぬ一ヶ月わが肌すべりしパナマの水は

二万キロ飛びきたりたる東京にて逢い難きかな久我山遠く

見ゆるものに心も眼まなこも奪われて私の住いのアルゼンチン臙

一日に五分ばかりを進みゆく目覚時計にたよりいる日々

三階の二部屋ばかりに來り住みお供え餅は小さく一つ

幼子はたちまち靡くドラえもん日本の国に流行るドラえもん

太陽にて育ちしリングと但し書きの要る国となりぬ私の日本

重心の低くなりたり日本に暮して畳に和紙広げつつ

蹠が大きく見ゆる日本の裸婦に向えり清々として

柚子の香をほんのり加えて出来上る私の好みの海鼠の酢の物

さし障りなきことを言いつつただに食う時に非ざる竹の子料理

口にまで持ちゆく動作残されて即成食品ならびならべる

かみしめて読むと言うには非ずして日本の書物積み重ねおく

金時と名付く蕎麦の焼けてくる匂いだよう田園調布

エシャロットとうずらの卵の黄身を乗せ一口に食む新しき寿司

頬寄せてキスする癖は続きおり私の幼子はアルゼンチン生れ

次々と修理することいくたびか地球を幾度も廻りし私の鞆

日に乾しし蒲団を叩く音をさせて日本の生活続けておりぬ
インドより来りてわが掌にやさしやさしインジゴ藍の泌みし木片
通りゆくは日本の人ばかりにて雪ヶ谷駅に我子を待ちつつ
凍る日の少なきままに日本の冬終りゆく洗足の池

常のごとく過して今日の終る刻肩に力を入れつついたり
家に着くまでに決めたきこと一つ田園調布の狭き歩道を

お茶を煎る香りただよう細き道日本の町を幼子とゆく

ほのかなる鯛焼のぬくもりに頼りつつ次の電車を待つ五分間
明日もまた同じ空気を吸うだろう午前七時の槐の並木に

水平に窓を伝いゆく雨粒にまぎれてたちまち豊橋の駅

エリカと知り小さき一枝頂きぬ見知らぬ人の墓の華より

手提よりセロリの緑のぞかせて田園調布の歩道を急ぐ

陽の当たるところに集いし束の間を言いつつ帰る新横浜へ

窓に着く鋭き氷の結晶と共に翔びゆく地上一万メートル

霞立つばかりにて私の丸き地球よアメリカの上空をゆく

金の国ペルーを通りぬわが指に慣れざる黄金色に戸惑いながら

何グラムかも知らずして一片の黄金というものの所有者となる

飾れるもの一つ無くして蒸し暑き部屋にリオ行きをしばらく待ちぬ

戸惑いもなきまま二万数千キロ旅の時間のわれに過ぎゆく

辿り着きしアルゼンチンのわが家よりも仰ぎ探す南十字星

私の棲めるアルゼンチンにはアルゼンチンの雀飛びおり日本に似て

ジャスミンの一花浮ぶ茶を飲みて昼の仕度に立ち上りゆく

おかあさんと呼ぶ声に幾度もふり返る日本の国には日本語の満つ

テレビより聞こえてきたるスペイン語笑う幼子わからぬ私

レタスの葉を手に押えて食うは由野の亀手を使わぬは玉由の亀

齒応えは二年前の思い出にて三ヶ月の日本に河豚食わざりき

三州とわずかに読める欠け瓦西日暮里にて歩みをとどむ

日本より読み始めたる一冊をアルゼンチンで続く味噌の起原の本

雑草の中より探しいだしたり蒔きて忘れしパイアの芽を

はやばやと寒さ恐れて居間に囲う今年生えたるパイア二本

ブラジルの丘の如くに伸び立たむ未来を持てり鉢のパパイア

ゆく先々になすべきことの溜りおり私の一日忽ち暮るる

まだ緑濃きプラタナスの木の下に幼子は待つ黄葉落つるを

わが這いて磨く床の上を歩む人を心のうちに選びておりぬ

おむすびを持ちゆけば友等の煩うるせしと吾子は今日もサンドイッチを選ぶ

里芋といかの煮付などを好むアルヘンティナモデロの学生の我が子

二粒の露輝けり居間に置く鉢に生えたる酢漿草かみきりの上

バタータと呼べば薩摩芋の総称にて品種ごとの名前を持たず

読み終えし本を再び取り出だす日本の文字は限りある日々

見ゆる色見えざる色も重ねゆく私の描きゆく一個のリンゴ
大それたことには強く向いゆく私の目の涙少女漫画に

あまたなる草木の中にパレルモの桑一本に決めしことあり
粟にて染めたる布を拡ぐればたちまち日本の感じ湧きくる

魚の骨咽喉に刺して死にしと言うアルゼンチンの猫の生立ち

七歳の頃に描きし癖いまもありナスビの水彩今描き終えぬ

味噌匂い魚の匂うは八階の日本人の私の住い

生えてくるカビの面積広がれり二週間目のナスビ描きゆく

幼らも各々の部屋を持ちながら小さき机の居間に集まる

特別に今日覚えたることは無し電灯を消すわが枕辺の

壁の色変えて見たれど何事も起らぬ良しとおもいつつ寝る
降らざるに石畳濡るる湿度ありブスタマンテ街に幼子を待つ
読みゆけば探す言葉のやすやすと出で来る本を一冊持てり
意味知らず読み覚えゆく幼子といろはカルタを遊ぶ折々
火の上にたちまち乾きて匂い立つたたみ鯛は日本より来し
忙しく思わぬ一日過ぎゆきぬ国旗は空色と白色の記念日
幼子の二人の好みを日々食べて私の好きなヌタは作らず
舌先に造りし国を言い当てるスパゲッティ好きの幼わが子ら
辞書を持ちパンダの死因読みてゆく第六刷ラ・ラソン紙にて
副社長と印押してあるその上にサインをするのが私の仕事

鳩のみを追いたる視野の育ちゆき玉由は見るアコンカグワを
トマトの味少し混じれる飲み物を持ちて話すはなしイスラエル人と
継ぎはぎの布の材質の異りを角度を変えてしばらく見つむ

四ヶ月過ぎても味の変らざる日本の山葵漬の故を思う

粗き砂混じる陶土に造りゆく裸婦立像は誰にも似ない

欠けし物は捨てむと決めて残れるはたった二つの日本の茶碗

湯煎せし蜂蜜のまた固まりぬ冬の最中なりブエノスアイレス

季ならぬことなど気にもかけぬらし冬に眼覚めて胡瓜食う亀

独学という程の事もせぬままに昨日も今日もスペイン語暮し

丸くして卵の黄身の甘さもつウルグワイの菓子舌にとけゆく

厚切りの大根煮ゆる音をたつ子供ら帰り来る時刻なり

生長点を残すばかりに葉を落し鉢を割りたるオンブーは立つ
学校へ持ちゆく図工の教材はわがベランダの枇杷の木の一片
轆轤など使わぬ原始の方法に私の作りし皿暖かし

一切の感激こばみし如くにて今日の予定の滞りなし

几帳面と思わるる程に正確にコーヒーの木の枝の増えゆく

枇杷の葉の影を甲羅に映しつつ胡瓜を噛みおり我家の亀は

まだ見ざるエベレスト山の頂上の尖れる黒き石がわが掌に

麻の葉の藍の模様の木綿のもの日々に着るなり柔らかにして

暖房の部屋に置きても成長はやはり止まるコーヒーの木よ

拾い來し椰子の一葉を捨つるにも苦心するマンション住い

ベランダに伝いて絡む蔦の蔓芽ぐみいたるをほぐしつつおり

静かなる土に身体を横たえて春近き日の一夜過せり

湿度ある夜のフニンの風受けて浮きを動かすペヘレイを待つ

何処までも続けるごときカンポにて親に纏わる仔牛の見ゆる

桃の木と知り見ておればかすかなる桃色のもの棚引く気配

何万ドル儲けしというには非ねどもマッチ一本を二度使う

大地より遙かに高き八階の鉢の土にて枇杷育ちゆく

われの手に拭けざる位置の硝子戸に雨粒の跡重なりてゆく

幼きより馴染み知りたる草あれば声高く呼ぶわが幼子を

移ろいの早く迅くして日本の方へ急ぐよ朝の光は

木の草の伸びゆき早くなりたるを心にとめて朝々をおり

人の背より高々と花の咲く薊私は小人になりたるが如

同じ豆荒く細かく挽き別けてその朝々のコーヒーの味

石畳濡らし増えゆく雨の粒テアトロ・コロンに宿る楽しさ

向い側のビルのペランダ遠くして常白く見ゆるのは何の花

学ぶなく私の範囲の言葉より探し遊びて暮るる月々

昭和五十六年（一九八二年）

おとなしく過しておりぬ朝の刻二匹の亀と私とだけの

目に見えぬ成長といえども忽ちに窓枠超えてコーヒー育つ

赤き花見ても弾まぬ心にて私は歩くサンタフェ通り

亀にやる一切れが大きいと抗議して西瓜食べおり我幼子は

我が子らの友に賑わう我が暮し日本語の人に久しく逢わず

ようやくに華やぐ日射しの中をゆきティパの木蔭に一休みする

話すこと決りしごとく慣れおりて遠く聞こゆる電話に応う

わが生れ育ちし村の名の読める海苔の罐置く常の食卓

重量感無き程やさしき淡紫わが掌のハカランダ花

亡き祖父の角張る文字の読みとれる和紙にて長き紙拵を作る

二十年の月日をかけて失いし祖父の写経の行方を思う

私の顔に似る所少しあり陶土に作りしわが胸像は

実物に笑いを加えてわが顔を陶土に作りて今年の終る

各々の家庭の匂い感じつつ八階のわが家まで昇りゆく

スペイン語の日刊新聞溜りゆく読まざる頁の多きままに

ブラジルの陽射しは強し高々のティパの木蔭の小さきに寄る

枝先に残り花あるハカランダ原産の国に仰ぎ見ている

積み上げし石の由来の重々しトレドの城塞に一夜過さむ

スペインへ来て常の日と変らざる争いをするわが幼らは

百二十数えて終る鐘の音にまだ夜の明けぬトレドの街

プラタナスの高き枝々透し見るパリの空は雲厚くして

交流の歴史の厚きスペインへ来りて知りぬ私のアルゼンチンを

セーヌ河に沿いつつ眠るというのみに常の日々より早く目覚めつ

雨の輪の重なりているセーヌ河夜景を五階の窓より見下す

一匹の犬の走りてゆくことも麗しきかなセーヌ河畔は

噛み締めて懐しきごと味のするフランスパンはフランスに来て

足の下に厚き雲あり見えぬままオランダの上を通り過ぎゆく

蝶鮫の卵にわれは声をあぐこの味モスクワを通り来たりて

音のなきままに積りてゆく雪に私も音を立てず見守る

真夏日の国より来たりてたちまちに氣遣いて歩く積れる雪に

三脚の椅子を交互に使いつつ四人家族の仮り住いする

朝の光に浮びて見ゆる綿埃わがセーターの色も混れり

味噌汁かコーンスープか選びつつ一つの鍋に二た月過ぎむ

日の当る時間は留守にする部屋に雲間草咲く花鉢を置く

手袋のなき手の冷たき寒の日に青き胡瓜をかりかりと噛む

アルゼンチンにて常に使いし袋持ち夕餉の豆腐蒟蒻を入れる

熱湯をそそぎてとろりと甘きもの日本のくず湯は朝々に食う

たちまちに千代の富士に叫びあぐる我が子の国籍質す人なし

小波の立つ日は氷張らぬ池今年も見てゆく朝々の道

日の光りに向いて花咲く雲間草夜はひととき鉢廻しおく

時々居眠りしつつ読み続くじゃがいの事書かれし本を

枝々の芽はいまだにて枝垂れし柳透して洗足の池

この角を曲れば常に風強しプリンスホテルのビルの下風

日本へ来りて日本語を使わざるとき思いに人混みの中

日本の国に住まえる人々の作る流れに従い歩む

幼き日わが好みたるおこしなど甘味好まぬ子にも食わしむ

食べ残す山独活うどの芽先は流台のコップの水に養う

仮住みのわが部屋の縁に飾るもの芽ぶき始めの玉葱馬鈴薯

ポケットに残る銅貨に求め来しエッフェル塔の浮き出すボールペン

霜柱とけたる後の黒き土浮べる上に足を踏み入る

しゃぶしゃぶ鍋に蘇りいるは鮮やかにペンペン草の緑坐り葉

二羽ばかり水輪揚げあいながら潜りし鳩の浮き来るを待つ

参道の砂利埃裾に感じつつ田園調布の家へ帰りぬ

前後まごころ子供ふたりともつれつつ細き歩道の田園調布

何処より来りし物か一片の枯芝を今朝の掃除機に吸う

スピードの見えざる闇の空中にエンジンの音と共に私はい

ジェット機の窓に額を寄せ合いて広々広し朝の光は

ポケットに残る拾円にて通話せし一言大事に私は旅立つ

カナダより持ち来し石も加えつつ常の暮しに戻りゆくなり

洗濯もの干す人も野鳩の飛び交うも常の私の窓の風景

麹菌の生き死になどを子の間いて真空パックの甘酒はうまい

夏の間の三月みつきを留守にせし家に色濃き醤油の暮しを始む

完全に忘れ去りゆかむ今朝のこと常の時刻にコーヒーを飲む

週に一度陶土を捏る日のありて置き場所に困るもの作りつく

ひと夏に伸びたる若き緑の色残りてコーヒーに三度目の夏

コーヒーの若葉を照らすアルゼンチンの朝の光の八階にいる

茂り合うハカランダ並木寂しきは私の勝手に定めたること

オンブーの実のまだ青く垂れたるを仰ぎ見ている朝のパレルモ

67 ムール貝好む植村氏と連れだてり大西洋に育ちし子らは

アルゼンチンに又冬の日となりて湯気たつ葛湯を話題としおり

聳え立つカナリー椰子を目標にバレルモ歩く朝日の中に

花のとき過ぎたるティパの並木路花の盛りをいまだ見ずして

青竹を担ぐ幼子を促して三河の細道ナズナ立ちいき

うろろうと日本の文字を探しつつ朝の時刻の忽ちに過ぐ

同じ豆同じ手順に入れゆきて日毎異なるコーヒーの味

心して餌を与うる亀のいででんでん蟲も住みつくわが家

思うこと定まりおりても鼻丸き面をしばしば私は仰ぐ

幼子と私とが使う日本語余分なこともひと声加う

プラタナス今朝はしきりに落葉するギーセの細き石畳道

逆光に透く羊歯の葉の数を増し私の窓の午後となりゆく

絨毯に光る一すじ残しゆきでんでん蟲は姿を消しぬ

何もかも飽きたるとき心にてちしゃの葉洗う水強く出して

落葉掃く人の眼の色は淡き青私は日本を離れて久しい

ユーカリの香りがあればその木ありひとときわ高き梢を仰ぐ

パレルモの池をめぐりて走り来ぬ黄色増したるオンブーの種

芝草を銜^{くは}えたる蟻の行列をよけて坐りぬパレルモ公園に

日本のおぼけが出る木と幼子の指^{ゆびさ}はサウセジョロン柳なり

走りつぐ苦しき息に名を言いてミモザの木蔭たちまちに過ぐ

69 亀の眠る季節となりてしばらくは我が食卓にサラダ菜忘る

畑より届きたる白菜荒々し青虫百足わが家を歩く

載きし里芋より零れおちる黒くしめれる大地ひとかけ

紅に透り焼けしが冷めゆきて赤銅の色に戻るを待てり

排水口をふさぎて溜るごみの中に私のオンプーの葉も混りいる

沿いてゆくパレルモの池の水増して揺れつつ映るセイボの残花

すれちがう時に動ける空気にも寒さを感じるこの二三日

指先の黒く染まるを嫌いつつ包みしままに萎えたり午夢

小手毬のスペイン語名を知らずして話題を一つ乏しくしている

インディオの手より顔を付けられし木彫の豹が私を見ている

南極の風にくるくる舞い落ちる楓の種その造形を

鼻丸き仮面を掛けし位置高く思いつつ忽ち三年の過ぐ

日本の鳥の子紙と同じ色の色壁にして私の住い

セイシャルエの野生の双子椰子の実もアルゼンチンの私所有

背のびして押したるらしき呼び鈴は末の娘の帰りたる音

白菜漬の季節となりて取りいだすギーセに拾いし石畳石

冬至の日の一日も常のままに過ぐ南極よりの風に目覚めて

パンパより来りきたてギーセの街路樹の緑混じる葉を散らし吹く風

窓に倚りて見下す今日のギーセ街人一人今通りゆくところ

息するも苦しきほどに暑かりき二夜過ししパナマのパナマ

わが体温伝えつつ造る大土鍋今年の冬には間にあわざらむ

残り咲く一花ありてパボ・ボラーチヨの濃緑の実風にゆらゆら
スペイン語の新聞に巨いなる活字して日本の自動車売らむ広告
南より風吹き来れば寒さ増すアルゼンチンの私の一日

スペイン語の会話さまざまの人らの中私は一人日本語思考

日本語とスペイン語とをそれぞれの人に合わせて使い分けおり
太陽と私の間をさえぎるは翔びゆく鳥の一瞬の影

絨毯に葉を散らしつつ常緑のコーヒーの木冬の最中

異人なる私の顔にためらわず道をたずねる今日は三人

我が作りし大きさまちまちのスープ皿四人家族の各々にむく

まだ一人に教えられることがあり友のカルロスには箸の使い方

貰い来しカルテに病名書かれてコーヒーの木の病氣治さむ

日本語と英語と使いて幼子のスペイン語の算数解けてゆく

向う岸の見えざるラブラタの河淀み布袋葵の傷める一株

ラブラタの水面に小波作り来し風にひととき髪をなびかす

我が心何に華やくたちまちにコーヒーの芽の伸びはじめつつ

八階の窓より見下ろすギーセ街鈴懸の枝すけて石畳道

単語はみな知りながら文章の意味分らぬスペイン語あり

幼らの宿題毎に何かしらスペイン語の国のことを覚えゆく

来客のある日は日本の匂いする味噌汁などを作らずにいる

73 コリコリと胡椒の粒を噛みしめて昼食の一切れの肉の大きさ

幼き葉の出で始めたるパレルモの木々を巡りて朝日の中を

咲くも散るも蓄もわれは日々眺む壁一面の墨絵の牡丹

ハカランダの並木続きて焦点にイタリアア広場ガリバルディ像

花咲かぬまま雨に落つる梅檀の蓄ふみゆくマンシージャ街

誰一人通りゆかざる時刻あり南極の風の強き一日

液肥足り虫退治してなお淋し冬の日々過ぐるコーヒーの木に

太陽の向きを知らせてポラーチョの新芽の出ずる季節となりおり

地球儀を廻し廻して決めかねおり今年の末に訪わむ国々

夏痩せということ忘れいるごとくわが体重の変らぬ二十年間

我家の三ところの扉にブザーあり聞き分けておりそれぞれの音

飛行機にて幾度か越えしラプラタ河今その水の上に浮びぬ

晴れし日の三日ばかりの続きたりラプラタ河に遊ぶ日となる

ウルグワイ河パラグワイ河重なりて私の視野にラプラタの河

右側に水きらきらと輝きてラプラタ河の午后となりゆく

海かとも紛う白沙を歩みゆくウルグワイ国に降りたちしなり

南米の土を溶して黄土色ラプラタ河に浮びつつ来ぬ

見わたしてただ水見ゆるばかりなり巨いなる河を横切りてゆく

河幅の最も狭きをゆくといいコロニアまでの七十キロあまり

混じるもの何もなき如き空の色空の色だけが見えている窓

パ
ラ
レ
ル
に
今
年
疎
ら
に
咲
く
と
い
う
桜
の
花
を
見
に
は
行
か
な
い

日々に読む本に葉しゆがが新あらたなり母ははという一日いちにちが過ぎて

週に一度のサラダとなりぬ濃緑のハコベ萌えつぐ机の水に

蓄たくわなど見えはじめつつコーヒーは小さき鉢はちにのび立ちてゆく

まず先に私が嬉しく鞠まりをつく手鞠唄てまりうたなど子に教えつつ

いれおきて忘れて冷えしコーヒーを一人眺めつつ朝は過ぎゆく

昭和五十七年（一九八二年）

コーヒーの若葉かすかに揺れている風は私の居間に届かず
信号を待つ間に仰ぐ国の花セイボの蕾はいまだ幼し

若き葉の影やさしき槐あり赤き車をしばらく駐む

朝早くセイボの映る池に来て水も私も動かずにいる

花咲くという華やかさあらずして黄緑色のオンブーの花

繁る葉の中にわずかに花のこる八重桜ありパレルモ公園

両の掌に満し拾える淡紅ピンクの花ラパチヨをしばし水に浮ばす

木より高く舞い上りゆくポラーチヨの綿毛の種の行方見ており

77 街中に飛び交っているポラーチヨの綿毛を幼は追いかけてゆく

石畳を割りて白話草生えており行きに見てまた帰りにも見る
作りかけの陶土の塊二つあり今年の終る日の近づけり

パイヤは熟して柔し朝毎に食み飽かずしてブラジルに居る
我脛に赤き一つの痒き点ブラジルを経し三日ばかりを

細き枝満して柿の実色づけり日本にしばらくを過さむとする

石段の隅を埋めたるもみじ葉のたちまち減りて寒くなりたり

蒲団打つ音がひと時響き合ふ乾しし私の蒲団も混りて

傾きてゆく陽だまりを追いながら日本の文字読み継ぎており

ビニールに包まれて一つの単位なり三個のなすびは味噌汁鴨焼

長々と日本に住まむ思いあり落ち着きて見る大根白菜

暮れてゆく空にアルゼンチンの星を探す私の幼子日本に来て
それぞれの場所にそれぞれ臭いあり臭いたしかめ日々通う道
日本に住まむ思いの整いて深々白し障子紙張る

真夜中に我を起して南極へゆくべき犬を運ぶ飛行機のこと

富士山の見ゆる窓硝子に息をかけて曇り残さず拭いておりぬ

今日よりは住人となる港区の地図を買いたり雲降る日に

朝夕に富士山見ゆる窓があり高輪四丁目私の住い

富士山のマーク付きたる水を飲み富士山見ゆる日々の過ぎゆく

表札は私書きぬようやくに日本に住む心地してくる

富士山の見ゆる所に住み始めアルゼンチンの話題が多し

唯一鉢我のものなるフリージア持ちてうろうろ玄関居間台所

夕焼を映して淡き色のあり白新しきわが父の歌碑

掃除機も皿洗う手も休めずに富士山意識して一日暮るる

鉢植の苺は熟れて目高泳ぐようやく住居らしくなりたり

幼子と始めたる日本の暮しには先ず十尾の目高が泳ぐ

日本茶の緑を好む幼子と生まれてわが子十年経たり

一日の損したるごとく過ぎてゆく今日一日見えぬ富士山

日本文字の新聞に読む出来事は恐ろしきかな昨日も今日も

満員の朝もがら空きの終車も見ゆ私の窓より山の手線は

東京にポリュームあげてタンゴ聞くアルゼンチンの十五年きかずして

飾りたるままに二十日を過ぎゆきぬボール紙抜きし赤鬼の面

話しいだす言葉を探す癖つきて日本語も一度暗唱してみる

易々と伝え得る言葉を持ちながら何か足らざる思いしている

見ゆる日も見えざる日にも幾度か富士をいい出づ東京の日々

日本の文字読み易くなりてゆく努力おこたるごとき思いに

日本の暮しの三ヶ月過ぎてゆく奴胤鬼の面雛飾りたてて

日本語を置いて海鼠にて日本の酒を飲み合うひとときもあり

三ヶ月過ぎたるはやも思い出なりブエノスアイレス清し麗し

足早やに駅への道のひとところ振り返りゆく花ある馬酔木

雪柳の一枝戴き我家に花瓶一つも無きことに気付く

遠きこと遙かはるかの間ののちに南極よりの電話は深夜

我家の九階までのエレベーターに夕刊の大き見出し読みつつ
起伏ある電波の波長を感じつつ南極よりの声はま近し

空のみが見ゆる角度に坐りつつただ白々と雨降らす雲

列になりて飛びゆく鳥の列を乱す一羽のことを思っておりぬ

我が窓より見えている梢の一枝も動かぬままに夜となりゆく

床に散る茶色の花を集めおり薫りは未だジャスミンにして

世界地図に探すはサンドイッチ諸島その島に行きし人あれば

湯気の立つコーヒー飲むも床を拭くも私の窓は富士ある景色

ウルグワイの晴天の空広し広し写真を私の居間にかかげて

ラプラタ河の広き小波キラキラを東京でいま思い出すこと

今は夏南極基地のスタンプの押されし絵葉書三通届きぬ

淡々と今日見ゆる富士の山の方より吹き来る風に窓を開きぬ

私に見ゆる景色のことごとく桜咲きおり日本にいて

菜の花の黄の花弁の二つ三つ掃除の後の居間に散りおり

梢よりもまだ高く舞い上るひらひら桜の花片のゆくえ

傾きし光の中を降るごとし淡き花弁を追いかけ追いかけて

やわやわと重なりやさしき八重桜その木の下はゆつくりとゆく

跡絶える時無くて音のとどろけり私の窓は第一京浜に沿う

少しでも長くと根より採りて来し土筆一本に話題集まる

薄すらと緑敷きたる床の間の土筆となれない胞子を拭う

ヨットにて世界一周に行く人も交えて地球を飛びめぐる話

思い出の有りて紅のえびね蘭枯れてゆくまでのしばらくを

十六年の間静かに住みし国今無理失理の戦いをする

長かりしアルゼンチンの生活あり今日は焼きたての煎餅の音

日本にいてアルゼンチン亜国の味を探しアルゼンチンにては日本探しき

南瓜の花大きく見ゆる土の道海までの坂かけ下りてゆく

望まぬまま来りて夜の香港に色かしましき灯見ている

看板の漢字の意味の読み取れて熱き日差しの香港の町

わずかなる土といえども数々の品種示して雑草の花

出揃いたる白樺の葉の丸まりて幼き虫の育くまれゆく

海の水見えざる私の部屋の窓船のマストの動きてゆけり

コンクリートの中に生きいて土踏まぬ日々過ぎてゐる東京住い

客を迎う今日の居間にと道草のエノコロ五本ばかりを採りぬ

たつぷりと木陰を作る原宿の櫟並木を今日より毎日

一瞬の稲妻が照らす風景は日本にいて日本の屋根

匂う日も匂わぬ日もあり家近く一畝ばかりの萋畑あり

蕺草どくろ草もびんぼう葛も差別せず指さし教う我が幼子に

抽出しの中に宝と幼子の集めし白樺の実ほほけていたり

日本の夥しき人口の只中に埋れて今日も過ぎてゆきたり

枇杷の実の熟れて落ちいるこの角を曲りてゆけば子等の学校

満員の日本の電車の乗り方がチリーの人との今日の話題

惑星へ行く道かともふと思う奇妙なる人々歩む原宿

今誰も居らぬ私の九階の窓を見上げて山の手線より

良き風の通りゆくのを喜びてアルゼンチンを思うしばらく

丈高き野アザミをゆつくり動かす原宿の風私にも吹く

木々の下未だ濃き靄がかかりつつ梢に朝の光は届く

パレルモの冬の緑の色を映すパレルモの池ひとときめぐる

オンプーの実を踏みゆけばオンプーの香り立ちたりアルゼンチンの国

パレルモの木々は未だシルエットその木々の名知りて佇む

テイパの葉の小ささが次々と舞いてゆくりベルタ通り我家への道

今は冬の^{アルゼンチン}亜国の人と行き交へり真夏の日本を私は発ち来て

枝先は揺れて乱れて冬色の柳を映すパレルモの池

オンタリオの湖清しトロントは日本への道のまだ半ばにて

トロントにて道を問われぬ私もたちまちカナダを通り過ぐる人

フランス語中国語またポルトガル語私によくわかるのは日本語

忘れ来しオリーブの一瓶ははるかなる地球のむこう側なり

アルゼンチンへ行きて戻りぬ東京に目覚めて電車の音の新らし

天災の無きアルゼンチンに慣れてきて東京は台風の最中にも地震

わずかなる震度といえども見のがさず私の壁のエッチング斜め

きらきらと輝く物質を含みつつ太古の羊歯は石となりおり

いかなる花咲かせいしかはるかなる太古の栄いまは石ころ

年輪の確かにありて石となる一億八千万年前のブラジルの樹は

夏に伸びし蔓先ゆららその影も揺れている道武蔵野の道

細道の水溜りいくつ跳び越えて猫になりたるごとく楽しく

鳴き方が下手ねと幼等話しおり東京品川油蟬一匹

東側が西側よりか定まらず夕べに我家を通りゆく風

緑濃き柳の影を映し柳色まだ新らしき洗足の池

一匹の夏の羽虫も入りこぬビルの九階に家遠く住む

酸漿も数珠玉もある一角を通りゆきたり地図を頼りに

流れくる汗をふきつつゆく道はおしろい花の咲き始め時刻どき

吹く風の見えざる窓の景色なり私の窓に品川の駅

水の音聞えず水も見えずして緑覆える玉川上水

昼餉とて少しばかりを食む時に雪いただかぬ富士に向えり

コンクリートを割りて生えたる莎草その数本に鈴虫の住む

紅き色鋭く見えて目黒駅通り過ぎゆく曼珠沙華の季節

始発電車の音懐しく聞えくる三時間ばかりの静寂の後

鬼蜻蛉やんま二匹よぎりてゆきしこと九階の窓の今日の出来事

少しずつ色褪せてゆくも確かめつ往きも還りも花曼珠沙華

万葉の世にも咲きしか曼珠沙華今日原宿の土手に栄える

まばらなる列を作りてゆく蟻あり十階建のビルの屋上

幾筋もある細道を少しずつ探険しゆく原宿の日々

マテ茶のもの一式を飾りてマテ飲まず東京の街中に暫く暮す

あれこれと思い惑いてようやくに今飲む物は熱々の白湯さゆ

見定めて跳びつき折りたるその枝に色付き始めの次郎柿二つ

手繰り取る蔓長々の手応えに実るも実らぬも烏瓜連なる

四五日は心躍りつつ過ぎてゆく櫃の実少し拾い持ち居て

湿りつつうるおう土を歩む道椎の実拾う櫃の実拾う

行く足を止めて見上げぬ原宿に銀杏熟する匂いだよう

日本が黄色くなつたと驚ける幼子と三島のあたりをゆきぬ

絶え間なきごとく電車の走りおり時々大きく一つ聞えて

柿の木の下に柿の葉散り積りその複雑なる色を踏みゆく

太陽が一際明るく射すごとき公孫樹の大木めぐしてゆきぬ

散りつづく木々の間につやつやと今勢いの椿の一木

粉となる迄踏まるる櫟の葉の上に今も落ち来て重なる木の葉

逆光の中に単色の富士見えて私の部屋に灯りともさず

両方の手の甲今朝は強張れりハカランダの国は遠々にあり

ひと所痛む左足をかばいつつコリドー街に画廊を探す

日本に住まぬリヤマもアルパカも其の名を付けてセーター売場

花の咲く頃とて私に届きたる切手は二千ペソのハカランダ満開図

しきりに今日槐の木影を思い出ずマーママの墓は今頃は夏

身寄りの無き人生にあらざる証しるしにて一箱みかんが私に届く

俯きて歩みいること気が付きぬ石ころ一つ見当らぬ道

明日よりは明るさに向う接点にて柚子も南瓜もいわれのままに

その姿を器となして南瓜一つカルボナーダアルゼンチン料理

枯れゆきてなお紅の美しく酸漿を飾る私の窓辺

九階に小さく住まうことのみに暖房具いくつか今年は増えぬ

露しとどのアルミサッシの窓を拭き漸く富士の山見ゆる朝

私の窓のようやく明るみて同じ朝の陽富士にも届く

我家のリズム年中変らねば買ひもの忙しき人等に紛れず

幼きより好みし味も加えつつ一年の日々を日本に食う

お住いがある当りとして朝毎に楽しみ歩む南青山辺り

見上ぐればシルエットなり新しき年の始まる夜の椎の葉

中国語わからぬことも気に掛けず台湾の山台湾の寺

台湾の石の一片を重く持つ荒々しさの残れる硯

日本の使途に合せて作られし品々幾多を見たり台湾

乱雲の光眩しきに細目して雲海の下は宮古島ならむ

視界の限り小波光り広がりて一万米より海を見下す

その木の名聞きて答えの無きままに旅終りなり香る木の花

紅き実もその葉もつやつや失せずして私の一月は青木と共に

一つ一つ種子を落せり芒の穂の梟のふつくら玩具

午後五時を過ぎていまだ明るきこと何にも増して嬉し此の頃

アルゼンチン風に牛肉の塊を転がせり末の娘の誕生の日なれば

一撮みの大豆に春を言い合いて一夜ほのほの過ぎゆきにけり

豆を撒くことをせぬまま子供等の作りし赤青の鬼の面あり

銀座まで十五分程の所に住みただ暮れてゆく日本の日々

オレンジジュースの空瓶に挿す一枚の雪柳ありて私の家

野菜等買いにゆくにも会釈して高山神社の近くに住めり

その昔は海なりと言わるる位置にいて海の見えない私の窓

公孫樹並木をゆきて柳と続く道共に葉の無き季節の中に

花びらを丸く喰いたる虫のあり赤き椿は玄関に挿す

一輪の白椿ありて九階の私の部屋に尺取虫這う

一言を聞くため五日待ちており午前も午後も電話は鳴らず

二粒の種子より日毎芽は伸びて林檎が実ること有るかしら

若さらに歩道埋まりてぶつかりつつ歩みゆきゆく表参道

商魂に教えられゆく日本の行事に少しは私も参加す

丹沢も富士にも登ることはなくただ遠き私の窓の風景

物皆が濡れて明けゆく雨の窓まろまる辛夷の花がまず白

慌しく昨日お萩をわれ食みて今日は柏の葉をむく餅

虫喰いも乱れもなくて咲き満つる花屋の花に少し楽しむ

土近く住む人々のうらやましもう幾日か土を踏まない

居眠りのただ一瞬にてたちまちに降りねばならぬ品川の駅

いちはずの花を一本頂きて振り返りつつ帰る留守の庭より

吹きだまりの土黒くしてたちまちに双葉の楓むらがりており

緑へと色移りたるクリスマスローズ見えざる姉にその花をいう

日本に住みて桜の季節となる花卉を拾い落花を拾う

道の上に降りくる花卉の絶えずして桜の季節の東京にいる

行列をして人々の見る物は副へ木多くしてぼたん一輪

景品のサルビアの種を武蔵野の土に帰して待ちおり幼子

ペンペン草の生えて花たつる土の上母と歩みぬ日向を選びて

両側に花水木咲く道をゆく時差に疲れてカナダはとろとろ

今日も又雨降りておりバンクーバーは忽ち通り過ぎてゆく国

新しき緑の色に香りありひととき草木に甘えて過す

木洩れ陽のゆれて櫟の木の下に私も身体からだをゆらゆらさせて

父母の庭より採りし二人静ひとりしづかなり東京高輪

ローム層の下より汲みたる水にて洗う鰻の白焼に山葵を添えて

佃島を歩みて重くさげ持てり浅蜷も鰹も色濃く煮えしを

足元を確め玉砂利の道をゆくとべらの香る方に向いて

まだ若き葉の広がりを見上ぐれば稚き柿の実も同じ色

当てもなく歩きていたり月島でパッションナリオの花に逢いたり

隅田川の海となりゆく所にて午後の日差しを眩しみており
隈笹にまだまだ隈なし坂道を友ありてゆく共に汗して

中国インドカナダ南米それぞれの原産の木を植えしこの道
菩提樹の花ある下を通り抜けいろはもみじにひと休みする
新しき枝先に蕾まだ幼しアメリカデイコはセイボなのです
雨粒のひとつつふたつを掌に受けてたちまち今日の予定変更
柿の葉は色艶増して厚き中稚き柿の実はまだ淡きまま

紫陽花の一花挿しぬたちまちに私の部屋は毛虫も蜘蛛も
暖房も冷房も効く私の部屋の窓より公孫樹の並木

99
ブッカキ氷の上にライチを剥きて載せ私の今日の最後の食べ物

サルタよりインディオの布が届きたり私の丈の洋服となりて
私の歩幅保てぬ行列をして明治神宮の花菖蒲満開

埋め立て地の先は海の水にして晴海埠頭に水母ただよう

淡々と淡きカスピアを飾りて土曜日の午後をすごしぬ

朱の色の丸きに浮ぶ白き種子人を待つ間にホオズキ鳴らす

音のなき細かき雨の粒を付けて未央柳の雄蕊は長い

幼子は言いて眠りぬ福子と米子豊かな名前の祖母たち

音をたてて独活うどを噛みつつ思い出さずその味恋いにし長き年月

南極の風吹きいと亜国アルゼンチンより電話掛りて蒸し暑き朝

アラスカにて求めし臘オットセイ臍の縫いぐるみ埃つもりて真夏日本

体重を支える膝に強さを加え裸婦の坐像のデッサン終わる

槐の花の季節に東京をうろうろと歩みて樹懶なまけものに逢いたり

私の窓に点滅する光東京タワーの形を夜々に

テール灯の赤き光のつらなりて続くを見ており眠られぬ夜は

寝むとして窓のカーテン閉ざす時プラットホームに多き人影

インサイの香り強くて中国の鯛の刺身を食む夜もあり

霞草の花にあたりのおぼおぼし眺めていたりただそれだけのこと

インサイも貝割大根も育ちきぬスポンジ畑に水を注ぎて

いま泳ぎいるも化石と私が持つも同じ魚のポリプテレス

101 やさしき心満ち満ちて線を描く今日のモデルのまだ若ければ

織り荒らき木綿好みて着る夏の過ぎてゆくらし今朝吹く風に
アメリカへ翔ぶ飛行機に乘りにゆく稲の穂の黄に色づく道を
水引を結ぶことなど知らずして今日一条の金線草の花

隅田川荒川中川江戸川を道は越えゆく成田空港へ

葛の花の紫の立房眺めきて冷たき葛の甘きもの食う

通りゆく人々の顔みな知らず小さく生ききてまた続けゆく

卓上に胡麻播器置きて胡麻を播ることを知らずにわれは生きゆく

萩の花秋刀魚は秋の物マスコミに教えられつつ秋を知りゆく

ブラジルの人にフェジョンを長々と煮ており我家はブラジル匂う

ポルトガル語のブラジル人とスペイン語の私との会話の成りたちており

犬蓼の淡きピンクに出逢いたり人を待ちいる私の足もと

煙もたてず秋刀魚を焼きあげたりマンション住まいに慣れし私

今日もまた常の日の人に擦れ違ふ柿の実落ちてつぶるる辺り

枯れたるもまたうれしくて飾り置く石榴えのころ鈴懸の実も

右の手に石榴の一欠け持ちおれば左手出して握手をしたり

萎え枯れし葉はむしりたり白々と花だけの菊の水を取り替う

両の掌に輝やく石榴の実をほおばりほおばり銀座を歩く

東京に大き白穂のそよぎいしパンパスタはアルゼンチンにて知りぬ

東京の本郷上野原宿高田馬場銀杏実る匂い満ち満ち

枝先に長き莢の種ゆれておりはなきささげに葉の無き季節

今日重く携えている大包みは子等のスープとなりゆく牛骨

地球なる単位をさりげなく言いて私の白菜漬けを食みて行きたり

昭和五十九年（一九八四年）

大輪の丈高き菊も山茶花も誰れかれの庭に見せていただく

我物という土は僅かも持ちおらず鳥のごとくに高きに住まう

ダンボール満たして私に蜜柑届く去年と同じく住み慣れゆかむ

前に後に私の肩に落葉する櫟並木はゆつくりと歩む

まだ重さある葉も枯れて乾けるも公孫樹の並木風に向えり

避けもせず踏んでゆくなり道の上の櫟の色よ公孫樹の色よ

明けてくる視界に幼子は声をあぐ今朝の地球はきれいに出来た

銀杏を食べ食べ語る私のアルゼンチンいまはハカランダどき

高々と聳ゆるユリノキ早々に花を終えたり葉を落したり

噛み締めて噛み締めており白き物椎の甘みのいでてくるまで

東京に住みて二年過ぎゆけば三の酉の市の人等にまじる

櫛にも公孫樹にも葉の無きこの季節私の両手はポケットの中

朱にちかき色も混れる山帰来今年終りの部屋飾りに

おしろいの黒き実を掌に握り締め歩みていたり新橋あたり

まんまるの月のぼる見ゆる窓のあり私の部屋に灯りをつけず

アルゼンチンにアロモという名に花の咲くミモザの季節の近づきでいる

富士の山冴え冴えの日に住み始め二年過ぎぬ富士見ゆる部屋

イタリアに伝わるパンを焼きながらクリスマスと言う日は暮れぬ

忘れゆき思い出しつつまた忘れようやく定着カバノキ科ヤシヤブシ

魚藍坂下りゆく私のつれづれに一葉残れるプラタナスあり
色白に生れし由野の肌焼けて水着のあとよワイキキの陽よ
塩素など入りいるらしき水道の水にも咲きて雪柳白

消ゴムで消したることく何事もせぬまま今日の日付は終る
手心の無くして一日暮るる時鮮やかすぎる逆光の富士

白白と目白の目元をはつきりと思いいだせりその日のことも
武蔵野の土を浮かせる霜柱溶けてゆきたり黒きふわふわ

暫くは鳥の糞など落ち来ぬを頼みて櫂の下のベンチに坐る
育ちたる家に木彫の鶯ありて今日鶯替の亀戸天神祭

三河国の豆味噌つけてキリタンポ焼く匂いしている私の家
降る雪をうれしさがらざる歳となり踏み締め踏み締め俯きてゆく
佇みている暫くも降っており傘重くなるま白き雪に

ものが皆白くなりゆく雪の日は白き湯気たつ真白き葛湯

藍色に原色の糸刺されているグワテマラのシャツを着ての一日

秋刀魚にも海鼠にも慣れて二回目の冬過ぎてゆく日本の国に

ブラジルの気温幾度とまず読みてわが今日始まる真夏マツナツ日東京

湯島の梅求めきたりてまだ花の一つだになき枝々見ている

丹沢山系の沢らしき所白く見え私の窓の二月過ぎゆく

香りくる香りは海のものにして沙の丘にたなびく若布幾千

重ければ嬉しさの増す葉の付きたる大根もらいて帰る道道

液体のゆれて鳴る音豊かにて私は抱く椰子の実一つ

幅狭き石段長く登りゆき福寿草咲く寿福寺のあり

里芋の味だけしている口の中今日のおやつのはのほのほとして

顔も名もわが知らぬ人に電話する話すべき用件二つがありて

明るさに目覚むることの多くなり怠け者になりたる心地

ほんのりと緑の気配しておれば風に軽し枝垂柳は

川越に朝ふる雨は線に見え雨の間に間に雪舞い混じる

背のびして見るは見知らぬ人の家の白梅白椿白々塀の中

吊革の動きにまかせ来て一時間大根の畑白菜の畑

コンクリート塗り残されしひと所路のとうありはこべらは白
飛んでゆく群は何鳥四五羽にて辛夷の白のその上のあたり

肺胞にまで確かに届く香りして空気濃厚沈丁花の道

八十を過ぎたる父の掘り取りし筍飾る高輪九階の部屋に

高輪の我家に深々と今日香る土つきしままの幼竹の子

三河の国の椿に棲みいし芋虫一匹新幹線にて東京へ来た

延び立ちしペンペン草のペンペンを摘みてペンペン耳寄せる

水道の水を嫌いているごとし早々と蕾落しぬ胡蝶花清し

人々の頭見ることに終始して背のびの向うにガンダーラ仏

春に咲く花々確かに咲き始め去年のことを思いいだしぬ

夕餉にはホヤの塩干食べむとして朝より弾む掃除をしつつ
吹く風に流れ流るる花卉はいくつ重量感はともなわずして
八重桜の花の過ぎゆく坂急なれど一日に幾度も私は通る
部屋隅に置くすみれの葉ことごとく朝日の方へ傾きなびく

若葉という同じ言葉に呼びながら木毎に色の異なる樂し

走りゆく車のワイパー確かめて雨仕度する九階の窓に

日本の気候の中に住みおりて夏物冬物混じるこのごろ

細き白き花びら重ねて伸び立てるヒメジオンの道が原宿にあり

太平洋に白く引きゆく航跡に矢車草を投げ入れし日よ

111 粟ぜんざいの黄のつぶつぶを食べしこと日本に住みて覚えし一つ

日本を知る小事典を持ちおれば何かしらあり行く先々に

人々の頭の向うに笑顔の写真その人に逢うことはもうない

あの花もこの花も散りたちまちに汗ばみながら木蔭を探す

葛の蔓逞し逞しく延び始め私の半袖の服が新鮮

僅か残る東京都電の終点近く面影橋へ今から行かむ

植えられて間もなき稲のなよなよに我子は一人アメリカへ行く

寝る前のひととき思い出づるのは今日の白詰草の群咲く景色

領事館にマルティンフィエロのあることを知りて行きたり横浜にまで

今日は二度国会議事堂の横の道通りぬ暗き夜景の時も

跳ねあげて歩む^はというを忘れて久し久我山よりの泥の一粒

忽ちのセイボの赤に声をあぐ三百余日のはや過ぎゆきて

水溜り避けゆく人に続きつつ朝顔の鉢朝顔の市

ほおずきの市の人等に混じりつつ海ほおずき鳴らし鳴らして

茶の木にも満天星にも花の無き季節久方振りの面影橋を

道の辺に採り来しえのころ動かして私の部屋を抜けてゆく風

振じり咲く小さき鉢の文字摺草移し植うる土無く私は住む

江戸時代伝うる如く音たつる吹きしガラスのまろまる風鈴

持ち帰るほどほどの重さうれしくて屋久島萩のつぼみ幼し

ほろほろと昨日咲きたる花は落つ屋久島萩の小さき一鉢

左の腕日焼けをしたり束の間の午後の日差し窓の辺にいて

ちりちりの花集まりて白真白さるすべりの道少し登り道

葉の色とまがうばかりのみどりにて小粒のぶどうの甲府に來たり

ぶどう畑ぶどう棚の連なりてなだらかやさしさ山まで至る

花過ぎし季節なれども近寄りて両手に拾うは沙羅の花萼

建物にアメリカの旗はためきてロスアンゼルスに私は今いる

今は葉の濃く繁りたるハカランダ久しくなりぬその花盛り

ロスアンゼルスに赤く彩りいし百日紅いま東京に咲き散る百日紅

葉脈を残して昆虫の潜みいる桜の木の葉伝いくる風

やわやわと湯気立つ枝豆の一粒に一粒の話あり今日の夕餉は

落ちてゆく太陽に向うハイウエーのり法を越えずに連なるわれら

何もかも戸惑いとなるただ七日ロスアンゼルスに過ししのみ

山の手線の土手に勢う葛揺らしめてゆく行きも帰りも

立房の葛の紫幾つ見て電車にてゆく茅ヶ崎までを

紅の巡りきぬ私の三百幾十日山の手線土手の曼珠沙華

曼珠沙華の赤くちぢめる花を描く私に寄りくる虻蚊紋白蝶

土の上に土に近寄りて坐りつつひととき彼岸花の紅描く

遠くより白きふわふわ見えている去年と同じきパンパグラスの群

説明の書かれている板は今日読まずメタセコイヤを高々見上ぐ

夕餉にはよめな御飯にしようかな踏み分けてゆくよめなの群生

サンタルシエ

露草と名付けし眼科病院ありアルゼンチンのブエノスアイレス

手に取れば花は散る散るポロポロと咲き極まりたりヤマハギの群れ

剥きている皮固くして栗の実の突りし辺りを思いに画く

新宿の御苑の緑に沿いてゆく住まい定めむ思いのありて

櫛の葉の秋に散らむと色付きし御苑のあたりに幾度か来りぬ

まつすぐに白き貝殻並べゆく幼子はあのことこのこと話し続けて

公孫樹の葉のまだ豊かなる重量感私の窓の景色となるべし

人間の作りしグレーの色満ちし品川周辺に疲れておりぬ

人工の味付けされし物に慣れて今日は噛み噛む木の実椎の実

我物と言う土なくて住みおれば移りゆくこと安々決めぬ

三の輪より王子を過ぎて面影橋今日まだのこる都電と共に

鳥達の食べ残ししをいただきます無農薬にていびつなる柿

干蒔に茹栗甘酒焼き餅など今朝たべてゆくアルゼンチン生れの吾子

子供等は朝大急ぎに出でゆきぬ柗の花ほつと薫りぬ

こまこまの柗の白花香る部屋今日より私の住居となりぬ

銀杏の成らない公孫樹の大木の近くに私の家を見つけぬ

榎の実の味蘇りつつ向いゆく明治通りを吹きくる風に

枯れゆきて猶朱の色の鮮やかなるほおずきは私の部屋のポイント

葉の減りし公孫樹の枝を透しくる朝の光りが私に届く

メキシコに伝はる仮面ペルーの笛取り出だしたり引越の荷より

来客の度に話しすテーブルの上に置きたる密柑のルーツ

朝明けの光も雨の角度をも御苑の木立にわが計るべし

屋上に登りし息切れ続くまま木の葉重なる御苑全望

干し終えし体操着スケート着の間より見ゆる御苑は冬の木々枝々

今は葉の無き公孫樹の梢揺りて小鳥が暫し止まりてゆけり

恙虫いるかと芝に坐らざる私を私の子供等は継ぐ

ひび割れてくることのなき御供餅真空パックというを憎めり

福引の一等が当り玄関に羽子板飾る次第となりぬ

飛びつきて赤き実採りぬ幼子よ烏瓜は我家に似合う

非常階段昇りてたちまち三階なり天井の低き建物に住む

紫の小粒つきたる小紫式部の一鉢など置く横丁を好む

119 東京が埋もれるかとも散りしきし木の葉は何処へかゆきてしまいぬ

自動車の通る度に音たつるマンホールの位置をまだわれ知らず

山茶花の赤き一枝飾られてビルの管理事務所は今年の終り

向い風強き旅所橋渡りゆく鶯にひかれて亀戸天神

埼玉より担ぎ来たれる植木買って七鉢ばかりの土の所有者

見にゆくは温室の中のハカランダアルゼンチン生れの幼子連れて

温室にぬくぬく南国の植物ありパラグワイブラジルアルゼンチン思う

緑の実をポツポツ付けてコーヒーの木は温められており東京の冬

木の色の変わりゆくまで驚持ちていむ冬の亀戸身近になりぬ

壁紙は真白きほどに貼られて私の部屋にエリカを飾る

鯉節の濃く匂いだつだし汁をまず作るなり日本住いとなりて

お祭りのあると知れば出かけゆく初めての土地初めて歩みて

我家の前ゆくバスに全線乗り両の終点を今日確かめつ

女坂の謂れは知らず登りゆく石の段々をただ少しばかり

土の中潜りて走る十九分湯島に着けり白梅を見む

梅林は蕾固きも混りいて梅の花弁を数えなどする

冬色の房総半島をひた走る太平洋の見ゆるところまで

打ち寄せし波のなごりの線幾つ残りいて太平洋の引潮の刻

昆布の根の太き二つを杖にして波の間に間の濡れたる砂浜

太平洋伝い歩みて砂浜の空豆の花揺りて吹く風

121 地上58階に物を食はしむる所あり見下ろして食う東京の灯を

ニュージランドいまだ見ねどもニュージランド産の栗南瓜今宵の味噌汁に

われ知りし音して海苔の乾きゆく細き道あり房総にきて

玉砂利を歩み来りて一休み辛夷の蕾のその木の下に

揃いたちて空に向えるリョウブの芽今ゆく道の喜びとして

甘酒もおでんも匂うことはない御苑の梅花は霧雨の中

湿りたる空気に匂いの層のあり梅の香松の香また沈丁花

備前の土2キロばかりを播鉢の形になして堅く焼きあぐ

育ちたる庭に白々咲きいしを思い出しぬ花屋の小手毬

ゆつくりと夕暮れてゆく畦道にペンペン草は背高くなりぬ

コッペリア見むと夕ぐれに家を出てまず白々の辛夷に逢いぬ

チューリップはや咲く頃かと計りつつ花屋の花信じられない

片栗の群咲く映像をよろこびて夕餉の汁はトロりとさせる

蜂蜜はアルゼンチン産を買い求む一匙一匙懐かしむごと

幼子の雨靴に一ひら付いている何処に咲きしかこの桜花

今脱ぎたるコートより散る二三片桜並木を通りきたりて

少しづつ槐大きくなりてゆく私の窓のカラスの巣作り

ピントはカラスの巣作りに合わせてあり子供部屋の望遠鏡は

ブラジルに来たりてチエテの川岸を流れの向きにひた走りたり

梅檀の実の熟したるこの今の時アルゼンチンの石畳道

馴染みいし木々は今日もかわらずにアルゼンチンのパレルモ公園

過ぎゆきし盛りの時を思いつつパロボラーチョの残花一花

大粒の汗流すこともせぬままに昼餉の肉の大き一片

枝先のセイボの赤は懐しく今終らむとする時に来たりぬ

若葉季の日本の景色に慣れていて南半球の秋色やさし

合計五日間腰かけている小さき椅子唯あきらめて飛行機の中

野ほたんの花咲く並木サンパウロ野ポタンの木陰有難し

銀座歩道の水溜りなど避けもせず真白き雨靴今日新しく

留守にせし部屋に入れるは公孫樹の緑通り来たる御苑の風を

三叉路の真中の道真つ直ぐにどこまでもゆけハーブ農園

初めての道を通りて初めての土地へ来れり小土呂房総半島

白々と白浮びくる夕暮に届きましたよどくだみの花束

百キロの指示音チンチン鳴れる時に虹のかけらが東京の空

上下左右コンクリートに棲み居れば十葉の花飾る楽しさ

どれ程の歲月過ぎてゆきしかと赤きへびイチゴ私の足もと

川風も夕立もよろしき駒形橋きよう水無月のむぎとろとろの料理

焼きたての熱きを噛みつつ帰り来る浅草寺仲見世手焼煎餅

雨の降る雨の季節の雨の日に赤く色付く私のプチトマト

惣菜を買いに行くにも花菖蒲を見に行くのにも傘さしている

菖蒲の花ことごとく咲き幾千の花にてゆとりのなきも寂しい

高々と高きを見上げこの年の沙羅の花時たがうことなし

かすかなる音を聞きたり濡れし地に沙羅の花落つ白新しく

二三日弾みていたり沙羅の花見に行くことをわが決めてより

甘泉園巡りめぐりて花尽し柘榴紫陽花沙羅小紫式部

拾い上ぐる美しき物は珊瑚樹の虫喰いの葉なりああありがとう

ほかほかと熱伝いくる包み持つ雨の銀座に焼芋買って

立ちて坐り寝ねて逆立ちしても見る楽しくもあり公孫樹大木

からからに乾けるタオル懐かしむ梅雨の晴れ間は忽ちにして

キーウイキーウイ鳥のニュージランド見知らぬままキーウイ

蓮の花梗にも蓮根と同じ穴日本に住まいて私の知りしこと

キーウイ畑小粒のブドウ葉隠れの桃久我山の道キョロキョロ

赤く変る一葉拾いぬ大島紬を染むるといふシャリンバイらし

アララギ一位オンコと良き名をもちている赤き木の実をわれ一つ摘む

背のびして小さく一枝折りとりぬかやの実かやの実まだまだ若い

我窓より見ゆるマテバシイ隠しつつ鉄筋延びてビルの建ちゆく

若々と蔓延ばしゆく烏瓜花を待ちます果を待つてます

朝早くまだ静まれる東京に槐の花の散りおつる音

子供等はタコス食みおりメキシコ風私は茄子に三河の味噌を

ミンミンの蟬鳴きしきるその下に新井白石終焉の標

抜け殻のあたり静けし油蟬の飛びゆくまでをひととき見守る

目覚めにはミンミン蟬のかしましき御苑の側の窓開け放つ

駅へ行く人等の歩みに揺れているエノコロの穂を私も揺らす

コンクリートの道の上に出で来て死んでゆく蚯蚓を幾多朝々に見る

金線草の花咲く道のみづひきのこと話しつつ我が子らと行く

カヤツリ草科の草の幾種我知りぬ朝々の道の蚊帳吊草の類たぐい

くるくると蔓伸ばしゆく匂い花屁糞葛の名は似合はない

幼くて御津の野山に遊びし頃ナンバンキセルには出逢はざりしを

蔓に黒き小粒の芋の光沢よ神宮外苑は零余子の季節

コロンビアのコーヒー戴くこととなり黄昏の頃家を出でゆく

自転車の荷籠の中で音立ててどんぐり踊る昨日拾いし

花咲くと花に浮かれしは束の間にてその実色付きその実の爆ぜる

どんぐりのまだ落ち敷ける所ありゆうべ私の窓打ちし風

菩提樹の木の下を朝歩みゆき新しき一葉が我が家にあり

八重一重濃きも淡きも木槿木槿田無の町の友の病院

赤松の赤延び立てる松林見舞いし友の病室の窓

梧桐の実を手のひらにころがして外苑橋のまん中あたり

散り敷ける小粒はつやつや濃き樺色椎の木の下椎の実のとき

四谷駅下りて歩きゆく並木道暮れてゆく影ゆりの木の影

わが窓に付く水滴は斜にて秋刀魚を食はむ思いを断てり

木通色あけびの木通を売りいる果物屋まだその味を知らざるままに

拾い来し椎の実たちまち食卓に並べて朝の食事となりぬ

一条の線光りてナメクジの天井を行くを良しとしており

緑より淡紫へつぎて濃き紫に移りゆくなり小紫式部

柘植の実の色付く日溜り喜びて人を待つ間のたちまちに過ぐ

燈火色のめだち来たりぬ烏瓜ま白き花の日より待ちいて

熱きまで背に受けている秋の陽よ日本に住むは何時までならむ

人間に近寄りて生くる烏らはベーコン銜^{くわ}える日パンを銜^{くわ}える日

潰れいる椎の実またまた踏み付けて椎の実潰して歩くこの頃

間もなく建築始まる様子あり赤のまんまの群れいるビルの間

豆^{フエジョン}を煮る処方はポルトガル語にてルイスは唯に豆^{フエジョン}を食みつつ

今日の日はただ安々と千六本銀杏切り大根思ひし年月長かり

霧吹きの水とレタスに生き延びるでんでん虫は三河の生れ
蛸型の凧一つ増えて住み続く千駄ヶ谷五丁目の真白きビルに

昭和六十一年（一九八六年）

ほんのりと耳朵が温ぬくなってきたガラナの酒というを少々

各々の木下に敷けるそれぞれの葉っぱを踏みぬ神宮外苑

公孫樹の葉の散り敷く道を滑りつつ夕餉の献立を考えながら

掃き清むる庭持たざれば落葉する今日の風の日楽しみており

実の青き青木に蝸牛放ちたり同じ屋根の下に暫く住みき

一面に枯れ葉敷きたる中にして端々し花びら山茶花の白

オリオン星座天井にありほのほのと今夜寝るなり由野の仕業

絵画館を支える白き大理石に残れるは三億年前の巻貝のこと

日本の景色らしくはないと由野言いて絵画館より眺むる日本

東京に坂道幾つかありて歩くわが足強くなりしや否や

咲き終えし花萼ばかり残りいて百合の木の並木の大き目溜り

名を知らぬ一鉢なれども我部屋に取り入れてより勢いはじむ

百合の樹の枝々通して東京のビル連なれる空が大きい

膾の頃と言ひ始めたり幼らに大根の色人参の色

酔の物のありて成りたつ私の食卓の上に今日より海鼠

数の子と甘栗を入れた袋提げてゆりの樹の並木の道を帰りぬ

塀越しに眺めるばかりの新宿御苑落葉は重なり青木の繁り

何の葉を焚ける煙の中をわれ歩みゆく朝日の方へ

青木の実色付き始めしに気付きたる今朝の空気の耳に冷たい

樹々の枝の梢の見ゆる冬の日は上を向きつつわが歩みゆく

鳥の巢の再び見ゆる静けさにしばらく何もしないでいます

私の日溜り横切りて何鳥熱海の海の方へ翔びゆく

まろまろとまろき雀ら啄めり私の耳朵の冷たき朝を

顎の線耳朵爪先の痛き朝も決めたることは決めたることく

刈り株にまた薬くすりののびて枯れて日本の冬馳け巡りゆく

様々な角度に筑波山眺めつつ私の一日の益子への旅

ほつてりの益子の器の重なりの向うにセリーナの光る白髪

三百キロ離れて私の母二人二万キロ先にももう一人の母

私の手帳のページを埋めてセリーナは帰りにゆけりアルゼンチンへ

南極へも行きにし羽毛のジャケット着て神宮の辺り朝々歩く
オーバーを脱ぎてもまだまだ暑き中オオオニバスを育める池
減びゆく草々動物集まれる育種学研究室に夕刻着きたり

靴を脱ぐことの多きに戸惑えり靴を脱がざる国のセリーナ

ピッピ―と国際電話弾み鳴るマッターホルンの麓に居ると

三浦半島の畑の人に声かけて大根いただく土つきしまま

道草をしておりますアシタバの今朝の芽若きを夕餉に摘まむ

昆布の根を持ちて海牛を突きたりいじめというを思い思いて

来たれるは大根の産地大根の畑の向うに水平線あり

気泡のあり硬くして黒き物一つ富士山の欠けら拾い上げたり

湧き出づる水のほとりに長く立つ富士山印の水のみなもと

人間の付けたる線の見ゆる富士おりおり雪の舞い上りつつ

百合の果莢枯れ色枯れ立つ富士山の裾野に遊ぶ日の暮るるまで

枯れし実の付き残りたり秋にれの枝々の道よ不忍の池

雪を寄するシャベル無くしてただ白を眺めていたり今日の終日

今朝よりは沈丁花薫る道となる向いゆく風いまだ冷たく

寺を見る目的もたぬ旅にして拝観停止というも何のその

日本の家並の続く処々紅梅の咲き白梅の見ゆ

一人居るこのひとときに吹く貝笛思っているより大き音して

妙の字は山一面に書かれていて妙の字は暮れゆき妙の字は闇

逆光に産毛光りてやさしやさし日本の裸婦に對いいる午後

パピルスのひと叢立てるところあり何とはなしに心の躍る

ひとり来て山茱萸の花の花盛り寂しくもなし人も恋いせず

肺胞にゆきわたりたる梅の香よ今朝の苛立ち過ぎゆきにけり

急ぎゆく闇に幾多の白浮ぶもくれんの花久我山の道

無限とも咲き満つる中の一花をスケッチします近くに寄りて

熱きまで背に受けている午後の陽よ桜の近く蟻と一詣に

日本の裸婦を描きたる次のページに桜の花のつぼみを描きぬ

風にゆるる枝先の桜花私も体をゆらしながら

花ピラは散りてゆきたりたちまちに夢の残れり赤の残れる

はるばると来たりて信濃の堤防の土筆摘みおり少しほけしを

食めばうましといいつつ破傘の一鉢を持つ食まむとは思わざれども

ほんのりと甘さ広がる口の中カタクリの花カタクリの葉よ

昔のことあれこれいいつつ子供らと共に土筆つみおり入間川堤

アルゼンチンに生れて初めて土筆食む信濃の川に摘みて来しもの

くちなしの花咲く鉢に来たる風よいまだ夏にはなりきれぬ風

くまん蜂やはり来ておりのだふじの房長々と咲き満つところ

ジュン菜の水に浮く葉の優し優し今日は国分寺の国分寺に来て

放射能ありやなしやと小雨降るアルゼンチンなりパレルモ公園

オンブーの実のたわわなる時に来つそのオンブーの木の蔭に

白い花淡いピンクの花落ちてゐるユーカリ香るユーカリ林

実となれる時に来たりぬアルゼンチンのオンブーセイボまたハカラランダ

もう三日雨降りゐるブエノスアイレス住みにし頃の甦りつつ

今漸く我は気付きぬ子等との距離地球の丁度半周なるを

アサードを食みても眠しミラネッサ食みても眠し只管眠し

視野広くなりたる心地しておりぬアルゼンチンより日本思いて

一年をへだてて同じ椅子に来つパレルモ公園の桑の木の辺り

メキシコの上空かなと蟹の爪食みつつ過ぎる飛行機の時

立話している人も行き交う人もアルゼンチン人にて冬の服装

ウルグワイをを覆える雲よりなほ高く我は飛びゆくブラジルの国へ

四百人と共に乗りいて淋し淋し一万メートルの上空にして

土手を焼く煙は車の窓に来るブラジルの草の香る香るよ

四十分たてばブラジリア四時間の後に赤道軌道違わず飛びゆく

私にはいま何事もなけれども日付変更線を越えているなり

金門橋一万メートルより見下ろしてあと八時間にて日本の成田

朴の木の裏葉の光る日日本へ帰り来たりぬ朴の花香る

七階の窓より見ている台湾の景色おほろに梅の雨降る

台湾へ来たりて三本飲み干しぬ餅米の酒の琥珀の色を

家々の庭にも平気にて生えているパイアの木は台湾風景

けぶりたつ激しき雨に着きしより降り止まぬかな梅雨の台北

初めて食む果実の名前を問う我に蓮霧と書きたり台湾人は

日本語と英語とを混ぜて話している台湾の人スペイン語は単語が一つ

お互に理解出来ざる会話には車を停めて漢字を書きぬ

定家葛の小さき一花拾いたり姫の櫛塚を覆いて咲けば

父母の庭の筍を振る舞えり我の生いたちを知らぬ人にも

思い出に出逢い出逢いて歩みおり父母といる父母の庭

吹きし人の丸き頬つぺを伝へつつ江戸吹き硝子の風鈴は鳴る

地平線は雲かとおぼろ中国の大陸上空をしばらく飛びぬ

中国の大地に我れのジェット機の影の映りてもうすぐ北京

雲の間よりうねる黄土色を見下ろしぬ中国の大河黄河を見たり

まだ若き玉蜀黍の穂をなびかせて着陸します中国北京

真直ぐに真直ぐにポプラの並木ゆき北京の町の人に出逢いぬ

自転車をつらねゆく人々を横切りてわれは天安門の紅殻の色

写真またテレビにて知れる天安門私はいま中国の人等に混る

つらなれる万里の石垣割りて咲く花はやさしきナデシコに似て

石積みて厚き壁長く造る国人々も棲む石積み積みて

中国の香辛料の匂いの中中国の人中国の街

曲りゆきてまだ槐の並木道槐に沿いゆく北京の町を

合歓の木の花咲く下に人を待つしばらくにして中国の言葉

古き物壊せば新しくなるものかと元紅衛兵のガイドは言いぬ

ふみ歩む一歩一歩に思いおり人はみな死にす万里の長城

夏いまだ曇り日に来て紫禁城後宮の人の始めし麻雀のこと

五百年経し黄色の琉璃瓦土にまみれし一片拾う

大いなる大陸に來ぬ足もとの土は続くよはてしなく続く

双瘤駱駝に乗れる束の間につたいくる哺乳類なる体温哀し

散りいそぐ花見ることく今日のわれは車走らせて北京を見たり

はるけしと眺めし燈影に近づきぬ歩き歩きて二時間の後

パラグワイの鬼蓮の花咲き始むマルガリータは由野を育てし

アルゼンチンより私の電話の呼び出しに応えず答えざる日本の我が家

わが^{からだ}身体にタンゴのリズム残りいてタンゴに歩む石畳道

ペンにて私は住みていしアルゼンチンいまオーストラルになりており

朝靄が木々の根元を隠す時エセイサ空港への道をゆきたり

ブラジルへ向けて飛び立つ滑走路二花三花タンポポの咲く

赤土の色を溶かせるラプラタ河巻積雲の影を映せり

十二時間の時差ある国と四時間の時差の国とに電話をしたり

赤道を越ゆる時刻は闇の中何も見えずに何か探しき

思い出すことの幾つかありながらコロンビア上空ボゴタの辺り

今度住むと決めたるアメリカの我庭にパームツリーの高々と立つ

毎日の景色となるか緑の木々少なき砂漠の名残の山々

朝々に私は自転車を走らすロスアンゼルスに慣れゆかむとして

夏の国より冬の国へと巡り来て帰り着きたり夏終る日本

養老の山並おぼろに見えていて癌ではないというが聞えぬ

名古屋城見ゆる窓辺のしばらくに新しき人とわれは出逢いぬ

瀬戸物の瀬戸に來りぬ陶土色の流れゆく川瀬戸川に沿う

瀬戸の山は少しづつ器になりゆくか私は湯呑を一つ買いたり

帰らむとする時香う白粉花に祖母を思うわが母を思う

運転を習いつつおり廻り廻る白詰草の花咲くあたり

エノコロの穂をゆらしゆく私の車はようやく則を越えない

日本の葱畑の畝ととのいて思い出のまた重なりてゆく

長き間使わぬままの品々も箱に詰めおりまたまた引越し

もう少し規律あればと荷造りす本のサイズはあまりにまちまち

英語の国に行かむと英語を習う五十三階建のビルディングに來りて

ゆりの木の少し色づく並木道アメリカ領事館へわがゆかむ道

広くなりし部屋に御苑の木々の影揺れゆれている発ち去る時に

生活の物悉く無くなりたる部屋にて飲みおり罐コーヒーを

日本にて共に暮らしし我が品々いま太平洋に浮かびている頃

友ありて友の蒲団のぬくぬくと心なごみて五夜経にけり

枝の秀に白き小さき花残り日本の秋の萩はゆらゆら

桑の葉の黄色に変わる時にして桑畑続く桐生に近づく

もうすぐ日本を發たむと見ゆるもの桜の葉紅エノコロの呆け

ひと花のダチュラ携えて帰りゆくわが帰る所いま有りや無し

滞在のホテルの部屋に飾るものコップに挿す白き白き花ダチュラ

昭和六十二年（一九八七年）

左側少し欠けている月見えてロスアンゼルス最初のわが夜
満月になりて我が家に家具揃う月の見ゆる窓雲の見ゆる窓

跳びつきてわが手の届く青き実よハカランダありロスアンゼルスわが庭に

日本で暮しし品々とまた共にロスアンゼルスの日々を過さむ

南天の実の紅くれないの我が庭よロスアンゼルスに住み始めたり

我が前を横切りゆきたるリス一匹鈴懸の葉のかさかさとして

しとどなる露の芝踏む朝々を我が生活と慣れてゆくゆく

日本の世界のニュースには外れつつ今日も私は生きているのよ

神宮の外苑の公孫樹は去年のこと今日アメリカの鈴懸を踏む

花の咲く一枝拾いて我が家の初めての花とす名知らぬままに

ユーカリの葉の沈みいて我が家のプールの陽の光射す

暫くは行方見つめて立ち止まる胡桃銜くわえたるリスに出逢いて

白濁の霏たち籠めて山々の隠りて日本の風景に似る

コンクリートに固められたるロスアンゼルスリバーの河沿いにわが住み始む

新しき土地にただちに順応する我が子等に続く一歩一歩と

砂漠なりし名残り乾く空気にも慣れつつ居たり昨日も今日も

英語にてまたスペイン語にて挨拶する人々ありてわれの朝々

お抹茶の泡の大小を言い合いてわれはいまカリフォルニアにいる

日本より持ち来し種の芽ばえたり貝われも育つカリフォルニアに

馬の道と標識立てたる所あり私の住いのバーバンクには

左の腕が日焼けをしたりハンドルが左側なる車に乗りて

新しき土地住み始め名を知らぬ花に出逢いぬ鳥に出逢いぬ

自然なる水の流れの蛇行のままカーブする道りバーサイド・DR^{ドライ}

ユーカリの香る並木に車止むいま夕暮れてゆくよロスアンゼルスは

仮住う思いに来たれるアメリカなり次ぎて帰らむ処はいずこ

振り向かず見ゆる景色は細長きバックミラーに枝々鈴懸

テキサスを今だ知らねど朝夕にグレープフルーツテキサス産を

グレープとグレープフルーツ好みつつカリフォルニアの日々の過ぎゆく

カーテンを閉ざさむ前の暫くはあかり増えゆくバーバンクの街

赤き灯も白き灯もみんなみなわが知らぬ人の住いのあかり

暫くの待つ間は日向を選びますカリフォルニアの熱き冬の陽

枯れ落ちし鈴懸の葉に霜白しカリフォルニアに冬の朝々

運転を覚えてよりは土の上の草々のこと忘れて過ぐる

不自由をするが好きねと我が子等に言われているよ英語モタモタ

高々のパームツリーに風見ゆるこの木の下に住んでおります

耕せる畑をいまだ見ぬままにカリフォルニアの野菜食み食む

日本語を話したいよと我が子等の英語の生活滞りなし

吹き溜るユーカリの葉に私のガレージ掃くよ箒買ひ来て

151 日本とアルゼンチンにブラジルも混りて私のアメリカ生活

アメリカへ来たりて日本のひじきなど欠かさぬ事を不思議ともせず

日本より持ち来し凶鑑に載りおらぬ白花やさし今盛りなり

どの空にも飛行機飛びおり朝も夜もアメリカの国飛行機の国

日本の季節を分析することもあきらめつついて今日つつじ買う

一つの地を動かざる人のこと思いつつ明日南米へわれは旅立つ

慣れたりと言うにはあらず戸惑いぬ今は夏なる南半球

窓開けて車走らする日続きつつカリフォルニアに春近づきぬ

言い置きておく程のこともなくなりぬ我子等はJ・H・スクール生

また幾度同じコースを飛びゆくか陽当りの良きメキシコ山々

ぎっしりと山の詰りている如きあわれなる地球の上空をゆく

何事も無きが如くにほのぼのと日の暮るる地球を上空にいて

空中に浮かびつつ撰る夕食は地球の上に培いしもの

野ポタンの花の散る散る街角にしばらくいたりああサンパウロ

大粒な雨が地上に落ちゆくを寄りて見ており十七階の窓に

ラブラタの河より湿度高き日に来たりぬ私のアルゼンチンへ

梢にはいまだ紫に花咲けるハカランダありわれはその影

今日の風少しは軽くなりしかとパンパグラスの揺るる道ゆく

赤土の色に赤々と流れゆくラブラタ河のほとりに立てり

アマゾンの奥深くゆきて金を掘りし一人と共に旅をしており

153
幾つかの書類にサインをわが終えて帰りゆくところはロスアンゼルス

東京へ行く飛行機に乗りながらロスアンゼルスで私は降りる

ボリビアとパラグワイの人とにわが留守を頼みて来にけりアルゼンチン

鈴懸の並木に停めたる私の車に音して春の雨降る

鈴懸の並木に今日より影のあり幼き葉っぱの幼き影が

アメリカの大陸に住むを知らながら逢うことの無き人の幾たり

春雪に頂上白き裏山を不思議と見たりカリフォルニアに来て

エニシダの大きひと鉢運び入れ私の部屋に花の散る日々

迷い込みて苺畑の続き続くカリフォルニアなり苺の季節

アメリカの甘海老二つ我が前に寿司となりたり一口にする

僅かなる日影も嬉し渋滞のフリーウェイに遅遅と連なる

円き月見たるばかりと思ひしが今日下弦の細き細き月

半砂漠なりカリフォルニアの水に洗いしコップに水滴のあと残りおり

水滴のあと二つ三つ残りいるコップに今朝のミルクを注ぎぬ

何という椰子かは知らず実を踏めり椰子の種類の数々ありて

すっぽりと鈴懸の木の影の中に入っていますよ私の車

枇杷の実の色付き始め車して朝ゆく道は眩しくなりぬ

延び立ちてま白清く咲く花よアメリカにてもカラーと言うよ

同じ箱同じ少女のデザインなり幼き頃よりの干レーズンを

四つ目の言語を選べと指示されて由野の父兄会無事に終りぬ

85度という天気予報を日本の温度に直さずに聞きながしおり

少しずつ暗くなりゆく空に向かいひたすらの思いの無きこと寂し

我が食事贅を極めて残りゆくマンゴの種チリモジャの種

ジャングルの中ならざれば冷え冷えの椰子の果汁の仄かに甘い

液体のゆれて鳴る音を楽しみて椰子の実一つ持ちて歩みぬ

見上ぐれば蓄蓄また蓄ほんのり紫ハカランダのとき

悪しき事せず生真面目に生きおりて今日も下りぬ我ドルの価値

パサデナに並木のありとわが聞きて車走らせハカランダ見る

ハカランダ咲き満つる町をうろうろと楽しむがごと寂しむがごと

ハカランダが咲けば私は満足と子等思いおりいとも容易く

私に影響のあるは二つ三つと聞きておりたり今朝のニュースを

損をすることなど無けれど磨きたる車に大粒の雨降りいだす

花咲くを気付かず日々に通いし道丸き果実りぬ胡桃大木

空を見る窓ある家に住みてより月々の月毎日の星

日本に輸出したること聞えつつ米国産のチェリー食みおり

ユーカリの香り楽しくユーカリの並木道ゆっくりゆっくりと

土踏まず生きているなり米国へ来たりてよりの日々の過ぎつつ

山幾つ越えて行くのか雲の中も暫く走るフリーウェイを

夏芝に今朝の露あり靴ぬれて歩みたのしみポストまで行く

日本の新聞届きて憂うることも多くなりつつアメリカ住い

雨の日の少なきカリフォルニアに住みながら水ふんだんに使う日常

世も末との思いもありつつ今日よりは残り御飯をフリーザーへ

合歓の花ゆったり揺ると同じき風私にも来るカリフォルニアよ

小さくとも影を作れりパームツリーその影頼りて暫くいたり

丸きまで大きな空あり巻積雲ありカリフォルニアのわれの立つ所

ティパの木より散りくる黄の花積りたりしばし止めたる私の車に

白き花咲き香りつつオレンジの木に稚^{わか}き実の柑子色揺るる

木もれ陽のやさしやさし芝庭に家守る犬多く放たる

オレンジの花に寄り来る蜜蜂を見ているばかり人を待つ間は

日本にてもアメリカに來ても求めたりアルゼンチン産のユーカリ蜂蜜

小さき葉重なり重なりやわらかき影揺れ揺れのねむの木の下

マルガリータ二杯を飲むを常として土曜日の夕刻まだ明るきに

混り色の無きまま咲きいる白粉花の紅は長く私の色

たちまちに蟻は行列作る日々砂漠の蟻らたくましましたくまし

槐の葉三つ四つ五つしばらく停めたる私の車に

百日紅に思い幾つか持ちながらロスアンゼルスの百日紅の季

靴埋もる一歩一歩のやさしくて夏になりたり我庭の芝

下弦の鋭き月の曲線に向いつつおりここロスアンゼルス

確かなる根付き思ゆる稲の色見下ろしていま日本に着陸

日本の大地に吾れ乗る飛行機の影少しづつ大きくなりて

日本の人々を掻き分けて日本へわれは分に入る成田空港

揺れ揺れる竹叢の色松の色日本の色のその中にいま

大きな空見上ぐることの多き日々雲の凶鑑を買わむと思う

十七時間の時差より目覚めて東京の夜が今少しずつ明けてゆくところ

見上ぐれば向日葵の季過ぎており私の生れし家の草庭

擦りいる足は痺れているという私にやさしき父の体温

ひと時を父母の温もり伝わりし私の掌を見ている飛行機の中

満席のジャンボジェット機の先端にて我が誕生日過ぎてゆくなり

ジャンボ機を右左25度づつ傾けて我が誕生日祝いてくれぬ

ほのかなる宇宙も地球も見渡しぬ操縦室の丸き窓より

人間の引きたる線に従いて我誕生日二日間あり

赤く咲くザクロの林を行く時はザクロのこのみ思っておりますぬ

三日後に金環食となる太陽沈んでゆくよバックミラーに

落葉する道となりたり我が子等の学校へ行く道鈴懸の道

銀色の車に乗りつつ決められし走れ止れに従っております

銀色の車走らせ過す日々細かきことはなおざりにして

生きてゐる心地僅かによみがえる玉蜀黍畑の細き道ゆく

かそかなる音聞えつつとけてゆくコップに浮かす南極の氷

いつの代の空気をふくみて凍りしか南極の氷の音聞いている

身づくろいしているリスを見ておりぬバックミラーの角度を変えて

椰子三種の鉢植を部屋に置きながらカリフォルニアに來り住みおり

羽ばたきの力強さの伝いくるハチドリ来おり我家の合歡に

ドライヤー使う度ごと揺れ揺れる酸漿提灯飾る我が部屋

二三日まちがえしかと早々に下弦の月となりおり今夜

供え物するでもなくて過ぎゆきぬアメリカの月のまん丸今夜

プロペラは透明になりて廻りつつプロペラ透して砂漠を見たり

何物も無理と思ほゆ砂漠にも一本の道引かれてありぬ

逆光に荒々しさの消えゆきて砂漠は淋し私は寂し

長き長き侵食の年月をこともなくひと日の旅にわれは見終えし

ほうれん草日々に食みつつ一年をポパイの国にわれは過しぬ

0メーターより始めて今日は三万キロアメリカ国を走り走りて

侵食の長き年月見し土地に続きネオンのラスベガスあり

Tシャツのままに迎える十一月を憎みつつおりカリフォルニアで
冷凍庫に仕舞いし和菓子のあることに私は少しやさしくしている

強風に落ちし枝を飾りたり我がキッチンにユーカリ香る
水道の水に伸びゆくアボガドにガラス越しなる光の届く
鈴懸の紅になれる葉を一つ拾いてしばらく歩みゆきたり
帰り来てまず見る樅の木の香り香りて我家の十二月なり
六フィートの樅の木に潜み住みいしか我家に来たれるこの蝸牛
ずっしりと砂漠の重み感じつつ一年住みぬ慣れざるままに
沈みゆく太陽に向きて走りゆく加州のフリーウェイを
スカンクが大群なして棲むというその山近く我等住みおり
狼か狐かなどと言い合うもたちまち紛るるハイスピードに

スカンクの臭いというを知りてゆく朝早々のフリーウェイを

音たてて胡桃の落葉今年踏む去年の音のよみがえりつつ

黒く飛ぶ蜂に従い歩み来て淡き紫の麻の木のあり

捻挫せし左の足をかばいつつクローバーの咲く野原にいたり

新しき職種と言いて犬達の散歩屋に出逢うプエノスアイレス

吹く風も残るセイボの赤き花も心地よきかなアルゼンチンは

夏の日を忙しく動くさま見ゆるアルゼンチンに棲みいる蟻よ

梔子の大きな花束いただきてプエノスアイレスの昼下り歩く

弾き飛ぶ種子を踏みたりパレルモのセイボはアルゼンチンの国の花

夕焼を透かしつつゆるるパレルモのユーカリの大木に馴染みて久し

マンゴーの緑の実のなる木の下にマンゴー買へりブラジル朝市
旅人の木あり来たりてブラジルに旅の二夜をわれは過しぬ

砂浴びをしている雀より白き砂がわれに飛び来るパレルモ公園
海ばかり雲ばかり見る旅なれど日本へ向けて飛び行くはよろし
アルゼンチンより乗りたる私の航空券折返し点の日本に着きぬ

私の住む家というものは無けれども日本へ帰ると一人ごとを言う
海ばかり十時間見たる私の目に先ず九十九里の浜私の国

心足るといふのでもなくさりげなく今日は冬色の日本に居る

天涯の孤独のごとき思案する何処に宿らむ日本の五日間

点滴の薬の匂う母の床に一夜過せりわが生れし家よ

我が肺に深く吸いたり水仙の香る空気よ父母の庭

常の日のスケジュールを共に過しつつ父母との一日たちまちに過ぐ

このままがいついつまでも続けよと父母の門を出でゆく時に

まん丸の月見て眠りぬまん丸の月まだ見えて起き上る今朝

夏の国へ行きまた冬の国へゆきわが一月の終りたり

白き雲やわやわ地球を覆う時コーヒーを飲む飛行機の窓

ピシピシと音たててゆるる飛行機にも食みている悲し哀しき

駅コンサートあるとききて東京駅の北口近くに一夜過ごせり

エニシダの咲き始むるに弾みゆく毎日の道常の日の道

167
梅らしき花咲く林もスピードを落さず過ぐるカリフォルニアは

テーブルの横にテーブル椰子を置きて丸き黄の花咲き続く日々

天窓の臙に曇りて上弦の月の見えいる我バスタイム

何処よりはり着き来しかまろまろとフロントガラスに桃の花びら

アメリカに住めば苺はストロベリーにてベリーという友が訪ね来にけり

前後左右ミラーに写るはみな車そのただ中に私の顔

白々と冬木の並木鈴懸並木私の車に丸き実の落つ

米国を離れゆく時を楽しめりフランスパンを食みつつ飛行

川ありて人住むらしき町のありアメリカ大陸見下ろしている

植物の見えぬ景色に疲れおり一万メートルよりアメリカ砂漠

遙か下方に少しばかりの雲ある日アルゼンチンへ向けて飛びゆく

カリブ海見下ろしており右の手にはドライシェリーのグラス
砂糖黍の畑の続くというキューバただ鳥影を見ているばかり
私の生ききし年月の半分を過しし国へ向けて飛びゆく

空を飛ぶ翼を持たぬに飛び出だす角度になれたり私の身体

稲妻に近づきし日も目の位置に満月ある日も私の日々

コマコマと動く性格にあらねども今年はや々8万キロ飛びぬ
わが家にハードロックの響きいてリズム取りつつ皿洗いおり

サンシュユの咲く時に来たりて父母の庭に居る居る心足りつつ

何かに効く漢方薬ともならむ貝母群生ふる父母の庭

まつわれる子供を連れた人の群に子供連れない私がゆく

たわたわに咲き垂るるエリカに雨細し砂漠の国より来りて一人
すみずみに心言葉のゆきとどき日本語の中五日ばかりを

細雨が降りいるが見ゆお濠の水ロスアンゼルスに傘忘れきて

キャビアなる言葉の為にキャビア食べ飛行機の旅あと数時間

一日の練習終えし子等乗せてドリアン香る我家へスピードアップ

微妙なるドリアンの味言い合いて始めての経験を一つ消したり

赤き実に和^{なご}みておりぬへビ苺カリフォルニアのこの片隅に

花咲くと声を掛け合う事もなくハカランダの花のハカランダ仰ぐ

サングラスを通して見ているハカランダ淋し気な色悲しげな色

支払いのチェックに今日はMAYと書くカリフォルニアは五月になりぬ

移りゆく季節の感じ無きままにそれでも住めりカリフォルニアに

適切に胡桃植えられ街の中にリスが住みおり人が住みおり

父の日よ母の日よと心しつつ国際電話のベルを鳴らさず

アルプスの水をアメリカで飲みておりアルゼンチンの子供等と日本の私

飛び出せるリスに猫また鳩に迄急ブレーキ踏む今日のドライブ

L Aの地図に加えて日本語の本が四、五冊私の車

アメリカは自由がないと嘆き言う由野はJHスクール生

私の窓より見ゆる常の山カリフォルニア名物の今日は山火事

TEL あったかともたも問う玉由に新しきこと起りいるらし

171 この木あの木その向うにはプラム実る木立の見ゆるカリフォルニアなり

ユーカリの香る木影を見つけしを六月の日の喜びとする

ひた走るフリーウェイの前方には砂漠にはあらず石漠の山

午後の日の光に向いてひた走る生きいることを紛らすごとく

窓開けることもなきまま同一の温度に暮す一年中を

大根を千に刻みて落付きぬアルゼンチンにてもアメリカにても

日本語の適切な言葉みつからず英語の俣またスペイン語のまま

ねむの木の木影に赤き車止めてメルローズ街の人等に混る

テキーラの入りてカクテルマルガリータ飲みつつ見るは白粉の花

キラキラの塩の結晶華やぎてマルガリータに肩ほぐれ来つ

梅の雨降りいるニュース聞え来つ砂漠の国に目覚めたる時

もう少しもう少し地球にいて下さい命のことに欲深くなる

アメリカのモデルに向う朝のとき言葉の要らない世界に籠る

七月の外気の暑さ知らぬままカリフォルニア住いおろかよおろか
エアコンに75度とセットするひねもす我家の温度は75度

日本にもあるよと言いつつガイドフランスのフランスパンの朝食
左よりのライトに照らす米国のモデルの足は伸び伸びと長い

アトリエのルネッサンスへ急ぐ道砂漠の山々連なれる道

わが車走り走らすコンクリートの砂煙あがらぬ道を走らす

百日紅今盛りなる道をゆきて真冬の国へ旅立たむとす

半砂漠カリフォルニアを楽しめる活字読みおりカリフォルニアに

しつとりと空気優しきブエノスアイレス吾は忽ちこの国人なり

仮住みのロサンゼルスより来てアルゼンチンの我家のカーテン大きく開く

種の多きマンダリンを懐かしみアルゼンチンの日々過しおり

父母を思うリズムの戻り来ぬアルゼンチンの十日ばかりに

手に受くる如く数多の星の中を翔びてゆくなりアンデスあたり

星の中飛びゆく時はスペインのシエリーの酔いに身を任せつつ

コーヒーを飲みつつ細き下弦の月と並びて暫くわれ飛びてゆく

冷んやりと砂漠の朝の新しき空気を吸えり私の日々に

紅く咲くブーゲンビリアに近寄りて車を止めぬ由野の新学期

星々が勝手気ままに動くようロサンゼルスの夜空の飛行機

風邪の咳一つすることにわれ思う日本の父よ日本の母を

マイルという単位の国に来たり住みマイルの単位になりて暮らせり

秋の日になりたることが話題にてベーゲルの朝の慌しきなか

朝の日がカウチ辺りを過ぎし頃カーテン開けて秋の日となる

自らに出来得ることの小さきを悲しみており秋という日に

人間と生れて人間を生み育てこのごろ淋しさつのりきたれり

やさしかる花々飾ることもせず砂漠らしく暮してしまふ

常にわれは見知らぬ人のテールランプ追いかけて追いかけて今日も一日

飛行機は九百キロのスピードにて我が母の国日本へ向かう

刈り株にまたの緑の日本の田圃に我が乗る飛行機の影

成田より来たれる足にまつわれる金線草の穂の父母の庭

まず香る金木犀を見上げつつ御津の子われは海苔粗朶思う

抽出しに蛹かこいて我が部屋に紋白蝶の数多飛びし日

母に近くもつと近くと布団敷きて幽かに酸素の音聞えつつ

三角の種蒔きでいる父の辺にわれうろうろと幼子のごとく

鳥達と競うごとく柿を食う鳥のつつきし穴ある柿を

まだ青き細葉小僧の生け垣に沿いて歩めり昔のままに

乗り継ぎて車飛行機新幹線羅府より御津までの十六時間ほど

日本と羅府の時差に我が旅の所要時間は0となりおり

平成一年（一九八九年）

ぬくぬくと秋の日差しは雲の上日本へ向けて飛びゆくときに

雲ばかり雲ばかりなり十時間太平洋を飛びこゆるとき

日本人の暮しがわれの景色なり新幹線でひた走るとき

白粉花のまろまろ黒く実りおり曾祖母からの続きし続き

柀の香る一枝背のびして折りとる母の辺に飾らむと

雨降れば濡れ色うれし風吹けば葉の音よろし父母の庭

ぼつねんと一人居ること好みつつ高層ホテルの小さき部屋に

ターキーを姿のまま焼く習わしに我等も従いアメリカに住む

177 南瓜とは言はず今宵はパンブキンパイ感謝の日には感謝をしつつ

さざ波は少しばかりの我家のプールユーカリの葉一枚沈む

料理するは日本語の本スペイン語の本この頃英語の本も加わる

ロシア語が英語に翻訳されながら我がコーヒータイム世界かしまし

イタリアに一夜眠らむ計画にイタリア語幾つか言ってみるなり

フランスをちよつと通して下さいなロサンゼルスのレストラン領事館

昨日よりも少し太れる月見えて昨日も今日もただ過ぎてゆく

長し長し続くよ続く飛行雲今日は並びてしばらく飛べり

カタリナへ行く地図と同じ風景が見えているなり窓の下方に

大きさは露める地球の上のニューヨークなり今着陸す

優越感を持ちながら翔ぶ鳥達は飛びおり我よりはるか下方を

飛行機雲も夕焼けているニューヨークへアメリカ大陸横切りて来し

飛行機の窓の小さき陽だまりに我が爪先のほのかに温くし

レマン湖の小波に散る満月を見ておりわれはレマン湖畔に佇ちて

冬枯れのブドウ畑の中にしてワイン飲むなりアオスタバレー

耕したる畑続きいて生活の煙りのあがるヨーロッパ大陸

地中海の海老の塩焼食べながら我が故里三河の御津の海岸

アピラなる城壁長く長くして冬枯れ薊ひともとありき

襟立てて足早くゆく積み上げし石のお城の城下の町を

たおやかに続ける丘よスペインの歴史と落ちている石ころ石ころ

みんなみな冬枯れているスペインの道をひたひた走るわが旅

スペインの土にて焼きたる一枚の皿を加えて旅続けいる

積み上げし石は二千年の微動だになき如くして雀が遊ぶ

スペインの国を照らし終えたる太陽は沈みゆくゆくオリーブ畑に

背伸びして覗き見たるテーマズの河面小波冬空映す

どんよりと明けゆく遅きロンドンの朝を歩めり町も歩みぬ

イギリスの旗のはためく窓に寄りこの国の人を誰も知らない

ロンドンのホテルに眠る一夜にて年変わりゆきて一九八九年

キングスロードクイーンズロードを何でもなき人間我れが歩むよ

女中部屋が地下にあるロンドンの家々の作りにこだわっている

スペインのどんぐり一つポケットに入っているよ私はカリフォルニア

夕焼けを追いかけ追いかけて飛びてゆき夕焼け続く三時間ほど

栄光を極めし男を見ておりぬさりげなく暮るる私の今日

少しづつ蓄ふくらむことだけに会話がありて明日となりゆく

散りてくる花卉まろくてやさしくてほのかほのかに春巡りくる

アメリカの生活軌道に乗りてより芝踏むことも希々にして

私の生き来し記憶に加うべしカリフォルニアのまろき月の出

温度差が大きくなりてとまどうよ日本のことアルゼンチンのこと

ロンドンやミラノの地図が増えただけまた続けいる常のアメリカ

茹ですぎと硬すぎと二つの文句あり私の茹でたるブロッコリーに

日本より空輸されたる炒り大豆に父母を語る一夜もありて

玉由の部屋に此の頃加われりジエームスディーンの大き横顔

一本の土筆さがして喜々といるカリフォルニアのハイウェイ土手

紅き花飾りてまぎれゆかぬこと知りつつ飾るホトケノザ紅

三回目の春巡りきてようやくに土筆見つけたりカリフォルニアで

伸び立てるペンペン草の白き花私の車を止めしところに

ポケットに入ってしまう小ささの雛を飾りぬカリフォルニア住い

日本のまた世界の行事次々とあるに参加をしつつ暮せり

百キロのスピードでゆくハイウェイこの頃見えしは雀の豌豆

渋滞の列に連なりて楽しきは烏麦光るハイウェイの土手

週一度芝刈りさるる芝庭に東の間に黄のタンポポの咲く

キッスチョコの大き袋を持ちており母を近々見舞わむとして

ブラジルよりスペインに続いて日本の母を見舞わむ地球一周切符

挨拶の言葉くらいはフランス語とこの頃混えつつ暮してみたり

嘴はパロボラーチョの棘ですよアルゼンチンよりフクロウ来たる

常ならば何する頃かと日本の歳時記調ぶ外国住い

英語のみ聞こゆる所に住みながら日本語思考の私の日々

日本語の国を出でてより長き日々日本語思考まだ続けおり

花咲ける此の頃を春と思いおり変化乏しきカリフォルニアで

日本語のルーシーショーに親しみき今は英語にてルーシー話す

オレンジは花咲きながら実のなれり各々の地に順ずる植物

百キロは人の生理に反すると抵抗せしは過去の事となる

丘一面州花ポピーの花咲くと音に聞こえて今年も過ぎぬ

桜咲く日本へ行かず春ゆきぬ世界の中に紛れつつ生く

大量のエネルギーが落ちており日向に停めたる車の中に

氷上にコンパスのごとき円を描き玉由の十年過ぎゆきしこと

時々シャネルの五番を香らせてさり気なき日をさり気なく生く

我が髪は我が手に切るを習わしに二十三年の外国暮らし

淡き淡き青紫のハカラランダこの花時はこの花になる

そこはかとなき此の頃の喜びはゴールドンポピーカリフォルニア州花

日本に住まざること慣れながら大根千六本の今朝の味噌汁

私の車の上に落ちてくるハカランダの花ハカランダの木もれ日

一日を終えむといでたるベランダに下弦の高き月に逢いたり

芝庭の午後の三時の散水に小さき虹の幾つかが立つ

ゆれているプールの水の反射してやわやわの光りす私の壁に

五、六本白髪ありたる此の頃の私にシャネルの五番香らす

どの方向に走りても砂漠の山にしてサンフェルナンドバレーに住めり

早々と朝の光はベッドまでカリフォルニアは五月になりぬ

食み終えしチリモヤの黒き種幾多返しやるべき大地を恋うよ

我が贅の極みと食めるチリモヤの成る木は何処私に未知よ

パナマにも北京にも行きにけり私の歩みし辺り人々怒る

帰り来し我家に匂い満ち満ちてカリフォルニア米炊けたるらしき

白樺も鈴懸も若葉出揃いたる道をさやさやさやさやわれは

カリフォルニアに三年目住みいてようやくに馴染み始めし樹々幾本か

細き細き下弦の月の月明かり今日の私のバスタイムなり

飛行機の華やぐ光り通り過ぎ浮びくるくる小さき星々

ハカランダの花降る所に暫くは佇むわれのカリフォルニアなり

日本の赤絵染付並べ置く茶ダンスゆらしてカリフォルニアの地震

我が母を思い思いぬカリフォルニアでアカンサスの伸び立つときを

幾たりかの友の顔など思いおり日本へ帰る日本の近付きて

白雲の中に分け入りまっ白なただまっ白な世界を飛びゆく

ジャンボ機をギシギシ軋ます梅雨の雲父母の国へはや近付きぬ

しつとりとしつとりと濡れている梅雨の日本へ来たりカリフォルニアより

しっかりと根付きし稲の田がありて日本のご飯のうまし甘し

黄昏の日本国へ辿り着きぬ十葉の白がまず新しい

黄に熟れし梅の成りいる父母の庭を巡るよ梅雨に濡れつつ

何一つ物音のせぬまま朝となる梅雨の雨の日の父母の庭

我が生れ育ちし家の窓におり六月の日の午後も過ぎゆく

母の辺に一ぴきの蚊の飛びおればひたすら憎む一ぴきの蚊を

穏やかに梅雨のまにまに朝がきて夜を戦いし母の命よ

竹の葉のさやけき朝に掘り取りし竹の子を食む私の命に

何事も無きかのごとき父母の庭蟻達蜂達忙しきらしき

犬蓼もかやつり草も引き抜きぬわが祖の墓にひとり来たりて

イヌマキの米粒ばかりの実に出逢う私の国の私の古里

報告も願いもなくて祖の墓に来たりて一人心落ち付く

我が母の苦しさを少し分かつごと苦しき今日をわれは過しぬ

一日を一日ずつをありがとう我が母の息細々続く

此の頃のカリフォルニアにも咲き盛る凌霄花は我が母の花

日本の母の時間割り思いおりアメリカ時間と少しずれつつ

わが母の点滴の時刻ニかサラダ菜を洗いつついるカリフォルニアに

古里の海苔にご飯をつつみつつ加州の昼餉に涙一粒

一年中豆雛を飾る我が家は日本離れしているかしら

そのままに置けば今頃勢うに赤のまんまを抜きし祖の墓

泣くほどのことには涙流しつつ九千キロ程離れているよ

七月がゆくにまかせてくよくよと生きているなり加州にて

たまたまに空を見上げぬまたわれは芝を歩きて生き続けている

長く長く異国の人等に紛れきて父母の家はやさしくやさし

何度目と数うることはもうやめてカリフォルニアはいま百日紅のとき

たった今私は母の無き子となる国際電話の指示音ありて

急げども急げども急げども母の笑顔にはもう出逢えない

飛行機のエンジンの響きに身をゆだねお母さんお母さんお母さん

スピードは九百キロで飛んでゆく母のもう居ない日本へ向けて
悲しさは1/6にあらざればうろろうろと涙こぼしつ

山百合の香りの中に我が母の思い出はありやさしき笑顔

受話器より伝はる涙の声幾つ幾つ受けて母なきことを悟るよ

湯気たつる日本のご飯のお仏さま我手に作る朝が来たりぬ

日本間も台所も薬局も母を探すようろうろと

忘れ得ぬ母とのことの浮びきて母の子になる心ゆくまで

二三ヶ所に母の鉛筆の加わりし私の作文は秀多かりき

丸二つの竹輪の押しずし旨かりき父と偲びぬ母のひとりを

いま炊けたる加州米ご飯の湯気のなか母の梅干し一つ載せたり

薬局に母のいること確かめて木登りしたりき蟬捕らまえき

押えいる海老のおぼろの揃り鉢に力伝いて母若かりき

好きな物を並べ置くわが本棚に今日より母を加う和雅院釈尼蓮月

わが母の病い治るにはあらねども太平洋をいくたびか越ゆ

母の残しし化粧水などつけてみる母と同じき私の匂い

今は亡きわが母を思う新しき心を加うカリフォルニアに

ひよろ高きカリフォルニアの椰子の木を母と共に見ることついに無かりき

走りゆく車の窓に時々はノボタンの見ゆ母思う色

アクセルを踏んでも踏んでもスピードに紛れゆかざる出来事がある

あの事もこの事も話すつもりなりき笑顔の母に逢えるつもりで

ころころの地球を覆う鱗雲を見下ろして父母の国に近づく

複雑なる心に日本に近づけり母亡くなりたる虚しさ知るため

草々の中に生きたる我が母の草々勢う日本に着陸

秋の気配の草々なびく滑走路我が乗る飛行機日本に着きぬ

父の焚く香の漂う故里に帰り来たりてただ坐りおり

淋しさも寂しき言葉もなにもなし雲を見ている父と二人で

しつとりと雨を含める黒き土日本を歩むやさしさを歩む

ベレー帽被りて銀座を歩みしは六十年前の私の母

ゆれゆれる柳並木の銀ブラが母の最後の思い出話

あらためてジャックと豆の木話しつ々父の鉢植の甕を茹でる

冬瓜のゴロリと大きく生りおれば由野と喜ぶ色も形も

蝦蟹を捕えしあたり指差して由野の歳に戻りていたり

古里を長き年月離れていて煮魚鱒の向きを間違う

今欲しと思いいる時湯気立つる甘藷いたたく私の古里

生まれたる所は御津の御馬にてまた来むために今帰りゆく

半年も雨の降らざること言いつつカリフォルニアへわが帰りゆく

十時間飛行機に乗ればカラカラに乾きているよカリフォルニアは

今何をしたらば亡き母喜ぶかただほんやりとほんやりと母を

今日活けたる矢車草に我が母の思い出がある思い出がある

何事も無かりしごとく続けゆく常の心に母を加えて

我が家に焦点出来ぬ日に幾度わがお母さんにあいさつしつ

蟬の声一度も聞かぬままにしてカリフォルニアの夏終りゆく

今日求めし湯呑みは私の母好みこのごろ母に近づきている

日本を離れゆく時いつまでも見えていたよ淡紫の私の母

コヨーテの声はすれども秋の虫も蟬も鳴かざる所に住めり

暮れてゆくフリーウェイを走りおり姉の葬儀の今その頃を

自らの意志なくなりて我が姉は草加煎餅を食みていたりき

我が姉の持ちしままなりし英語学とグランドピアノを羨みており

まっ先に我れの外国生活をよろこびくれし姉のはや亡き

わが姉の作りくれたる縫いぐるみ携えて乗りたりき南米航路

瑠璃姉と我が呼びおれば我子等も瑠璃姉ちゃんと呼びつついたり

姉の弾くピアノの音色に育ちにきショパンの雨だれいま口遊む

ピアノ弾く姉指（指）の長くして握手したりき別れにいつも

流行の最先端を生きし姉急ぎ急ぎ病みてしまいぬ

私の外国住いと同じきほど長く病みたり我が瑠璃子姉

曼珠沙華の一花二花残る庭母を偲ぶよ姉を思うよ

瑠璃色の実の光りいる薺茗荷父母の庭に瑠璃の色

沈香を焚きていでたり母と姉の写真の並ぶ古里の家

もうすぐに刈り取らるるか日本のお米稔れる景色の中を

富士山の見ゆる景色に居眠りをしている人あり日本の旅

泣きだしてしまわぬように自らを励まして歩む久我山の道

一人来てレモンシャーベット頼みたり姉と坐りし窓辺の椅子に
母と姉との写真の額縁求め来てまたも涙を流すよ流す

声をあげて泣きたる時に目覚しの鳴りてたちまち常の日となる
姉の弾くグランドピアノのその下に潜り遊びし日もありたりき
供えるは加州に咲きたるバラの花母に似ている姉の写真に

平成二年（一九九〇年）

散水のスプリングラーの一つ一つ虹が立つよハイウェイ土手

今頃はマゲノリア並木走りいるか由野の最初の一人ドライブ

安々と虹を幾つも作る土地カリフォルニアにて虹を追いつつ

広大なるカリフォルニアのどの辺にて穫れたる芋か今ふけますよ

母と姉を思う物は持ちていずカリフォルニアではわが心だけ

私の知らざる母の事など書かれたる一冊はナイトテーブルの上

加州にも和菓子を作る人ありて栗蒸し羊羹歳時記どおり

母を姉を偲ぶよ思うよ日本の濃き濃きお茶をこのごろ好む

部屋毎に毛足の長きカーペットを敷きてふんわりアメリカに住む

横切りし馳追いかけしこともありき古里の廊下冷たかろうと

和三盆と書きたる御津の菓子箱にまだ落雁の幾つかがあり

バカンスに出かけてしまうと庭中の菊を戴きて我が家は菊菊

ハイウェイひた走りゆきて求め帰るわが日本の新刊書五冊

草々の母に謝まりて今日供うカリフォルニアの花の名知らず

私の家の中には何事も変化なきまま母と姉亡し

帰り来る子等の時間を正確に知っているよわがアメリカ住まい

今日のドライブはもうお終いとてドライシエリーの一杯ほどを

華やかにやさしく咲ける花あれば姉のごとしとわが決めて見る

ガレージの扉ドアにすれすれ当る処に小僧のならない細葉の木一本

こんなにも母を思いしこの年の終りゆくなりカリフォルニアに

暗号はユリコとしたらし初めての玉由名儀のキャッシュカードよ

小波の光りまぶしも太平洋上一万メートルの空にいる

晴ればれと晴れている空飛びてゆく得をしている心地しながら

濃き紅き夕焼に富士の浮びいる日本の国にわれは着きたり

新宿の高層ビルの点滅の赤き灯見えており時差に目覚めて

かぶれしこと蘇りくる銀杏の匂い懐かしき神宮外苑

加州より傘持ちて来て穏やかにまだ秋の残る東京にいる

東京の日暮れの人等に混りつつ東京人のリズムを乱す私

辛口の熱かんの酒を飲みのみて私の身体やつと日本人

岩手山全けく見ゆる窓辺にて父のことなど母のことなど

盛岡といわれて盛岡と思いおりなにほどのなき町に北上川

首長く飛びゆく白鳥の見ゆるといふ今夜の宿は雫石川近し

雪降りを歩みておりし日本よりたちまちにして夏の南半球

アマゾンの樹海の上を飛ぶ時にああ地球が暮れてゆくゆく

海海海聳ゆる山々また砂漠その上を飛んでアルゼンチンまで

困ること何も無いよと国際電話の声はしゃぎいる留守番の子等

右肩に南十字星ついてきてもうアルゼンチンのわが家は近し

さあここが私の家よ母と姉との写真持ちて来ぬアルゼンチンまで

北極へも続きてゆかむよまっ白に凍れる町を見下ろしながら

ただただに飛行機に乗りていたるばかり四万キロの切符終了

母と姉に赤き実豊かなる柊を供へて私のクリスマスなり

月々の歌作らむと思う度に涙流しぬこの月もまた

わが耳の気圧乱しての四十階東京の日々を宿らむ部屋は

高層のビル建ち並ぶ新宿にてわが髪乱すはビルの下の風

ここがここが私の日本かただ立てり高層ビル群の窓の一つに

空高く窓作りゆくが文明か新宿ビル群の冬の朝空

東京に宿る私の大き窓都庁建ちゆく景色を見下ろす

ドライブをすることだけに暮しきて階段も歩道も人満つ東京

三泊目のホテルの窓にやっと知る富士山の国へ来たりしことを

本当の日本へ来たねと安らげり玉由の祖父の古き巨き家

水仙の匂い新し祖の墓よ詣りくれたる人ありしなり

玉由に私の思い出食べさせる三色米粒のいが饅頭を

世界一美味しい物を称えつつ御津のうなぎ飯にまた出逢えたり

古里の父の歩みに従いて水仙香り万両の紅の径を

我が母の使いし寝椅子の窓からは赤き椿が一花見ゆる

もうすぐに八十八歳になる祖父に玉由の笑顔飾らぬ笑顔

四角四角のビルの群々やわらげて細かき雪が渦巻きて舞う

足元の危うきことも遊びにて雪の降る日は遊びの心

ロスアンゼルス

L A に帰りきたりてまず供う母と姉とにチューリップの赤

好きですよ冗談混じりに言う声はエッフェル塔のその近くより

焦りとも絶望的とも思われて母の亡きこと姉の亡きこと

諦めという言葉だけ携えて飛行機に乗る十時間ばかりを

私の行きし辺りも易々と事故が起るよ地球は寂し

あとかき

親から独立するにあたり、地球の上で「これ以上は遠くなれない所へ行ってみるのも悪くない」と思い立ち、アルゼンチン、ブエノスアイレスに移り住んでしまったのが、一九六六年。

資産や親族、友人達からゼロになったことも大きなことではあつたけれど、言葉がゼロになった衝撃は、とてつもなく大きかった。

スペイン語が、少し少しかかるようになるにつけ「日本語の大切さ」私には、隅の方まで理解できる言葉は日本語しかない」ということを思い知り、そしてそして、この一冊の私の言葉の本に辿り着きました。

一九九〇年七月一五日

高山 由利

一九九〇年九月三日 発行

歌集 地球にて

著者 高山由利

発行者 石川靖雄

印刷者 塚田益男

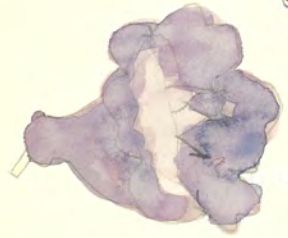
発行所 石川書房

〒109 東京都新宿区北新宿
二丁目二十一番一号
電話 03-3691-2541
振替 東京七―四一八九三

定価 二五〇〇円

本文印刷／錦明印刷株式会社

製本／山田製本印刷株式会社



tuin tuur



メイボ, CEIBO
アルゼンチン国花



ハカダダ
JACARANDA

